



- ◆池畔俱樂部日本画展覽會
七月一日より五日迄
- ◆日本鑄金會作品展覽會
七月八日より十二日迄

七月一日より
中元大賣出し
格安品取揃へ

- ◆大像會象牙彫刻展覽會 七月十五日より十九日迄
- ◆第一回滋岐美術會展覽會 七月廿一日より廿五日迄

△白木屋呉服店



(刊 新)

童謡集

十五夜お月さん

◇野口雨情先生著 ◇本居長世先生曲 ◇岡本歸一先生畫

皆様が久しい間お待ち兼ねの童謡集十五夜お月さんが、本居先生苦心の作曲と、岡本先生獨特の装幀と繪とが付けて出来ました。野口先生が今を去る二十一年前初めて童謡に筆をとられて以来の傑作は全部本書に載つてをります。郷土の人と土とに對する愛の親みと輕妙限りなき辭句とは、童謡を作る人々にとりてはこの上もない手引草となり、又、小学校に於ては唱歌の教材ともなります。本書十五夜お月さんによつて新しい純日本の童謡を、初めて後世へ傳へることの出来たのを弊堂の誇とします。

四全一冊 版入箱最上製美本
六冊一冊 價實金壹圓廿錢
送料八錢

編一	西條八十先生著 抒情小曲 靜かなる眉	第十版 袖珍箱入天金頗美本 價金九十錢 送料五錢
編二	水谷 勝先生著 小詩寶 石の夢	第五版 袖珍箱入金線頗美本 價金九十錢 送料五錢
編三	野口雨情先生著 集民謠別 後	四版 袖珍箱入金線頗美本 價金九十錢 送料五錢
編四	竹久夢二先生著 小詩情 靑い小徑	近刊 袖珍箱入繪入頗美本 價金一圓廿錢 送料六錢

東京市田區南保町十六番四
東口替振
尙文堂發行

◆日本に始めて現はれた民謡全集◆

生田春月氏編 ■ 新刊 菊半六號 二百余頁 裝幀極美(優に八百頁以上)

日本民謡集

定價一圓八十錢
送料八錢

民謡は日本民衆藝術の精華である本書は我邦の古代より現代に至る迄の荷も民謡と稱し得べきものを悉く網羅し我國の民謡が如何なるものであるかを一目の中に知らしむることを期して一に文學的價値を以て採否の標準とし純粹に文學的作品として鑑賞さるべきやうに努めた荷も日本民謡を知らんとする者は本書一冊にて充分の満足を得べく幽婉にして哀切を極むる日本民族天真爛漫の調べは本書の上に燦然たるものがあらう

内容 目次

紀唱歌集。萬葉集。神樂集。催馬樂。東遊。風俗。雜藝。今様。梁塵秘抄。延年唱歌。朗詠。小謠。小歌。中古雜唱集。閉吟集。隆達小唄集。諸國盆踊唱歌。松の葉。松の落葉。若みどり。よし原小唄。鹿の子。絲竹初心集。當世こゝろた揃。淋敷座の戀。御笑草。諸國の歌。浮れ草。巷謠編。御船唄。尾張國船唄集。艶歌選。潮來考。潮來風。小歌志覺集。小唄のちまた。長唄。端唄。大津繪。二上り。新内。琴唄。都々逸。俚諺正調。諸國俚諺及流行歌。童謠。古謠拾遺。名家吟及雜。

◆藝術的價値高き理想的民謡全集◆

童話集 池の底

大村謙太郎著 ■ 新刊發賣

童話を愛讀なさる皆さんには是非お勸めしたい新しい童話集が出来ました。著者大村氏はこれ迄色々な雑誌へ匿名で面白い童話を澤山書いておられたのですが、どれも讀者に高い趣味と新しい知識と美しい感情とを與へることに苦心してゐられます。話の面白さと美しさとは何時までも懐しい氣持を起させるでせう。本書には三篇の長篇童話が収めてあります。

裝幀意匠山本 鼎
挿繪五枚鶴田吾郎
全一冊二百頁餘
定價一圓二十錢
送料六錢

家のない兒

楠山正雄譯 (エクトル・マロー作) ■ 新刊發賣

「世界少年文學叢書」の第十七篇で、愛と人格との教化といふ評語で世界に知られてゐるサンファアミニユの翻譯です。外國ではどんな家庭でもこの書を備へてゐないのは恥だと迄云はれてゐます。原書は既に千百版以上ののぼり、作中主人公少年ルミの哀れな話と繪巻のやうな境遇とは、讀者に淨い、高い愛と純潔な氣持を起させずには措かないのです。本書は優に楠山氏苦心の名譯です。

色彩 裝幀美 本
挿繪五枚鶴田吾郎
全一冊四百六十頁
定價二圓五十錢
送料十二錢

ハガキにて御申込
次第出版目錄進呈

楠山正雄譯
ベロー作

驢馬の皮

世界童話名作集第一篇
定價一圓半錢送料六錢

井上芳子譯
アフアナシエフ作

魔法比べ

世界童話名作集第二篇
定價一圓半錢送料六錢

矢口達譯
マクドナルド作

軽い王女

世界童話名作集第三篇
定價一圓半錢送料六錢

東京牛込區
津久戸町六
精華書院
電話番町一七五七
振替東京四三六六

東京中 神樂町 越山堂 振替電話 東京九段一 二九三 四五九二



舞臺情緒が
まのあたり

賣出案内
無代遊星

座らにして
お芝居の
見られる
便利な
レコード

全部十二時兩面盤

(定價一枚參圓也)

歌舞伎劇 鑿引 (三枚)	市川猿之助 市川壽美藏 市川八藏 市川左升 市川紅丈	橋辨慶 (二枚)	市川 市川 市川 市川 市川	唯子 長唄 芳村伊十郎氏 三味線 杵屋榮藏氏 上調子 杵屋榮次氏 笛 望月多藏氏 小鼓 望月太左衛門氏	父歸る (三枚)	現代劇 菊地寛氏作	外社 狂言方
--------------------	--	-------------	----------------------------	--	-------------	--------------	-----------

りな店約特の社當もれ何は店器音蓄るあ用信

NIPPONOPHONE

小川未明氏新著◎最新刊◎(判別彩色美本、口繪及寫真挿入)
定價一圓六十錢、送料十五錢

童話 赤い蠟燭と人魚

「童話は子供を愛さなくては書けない」「作者が自身の子供の時分を慈しみ、懐しむ心から生れたものでなければいけない」とは、小川未明先生が此童話を作った序文の一筋であります。即ち作者自身の子供の気分になつて書いたのであるから、他の童話とは頗る趣を異にし、真に子供を樂ましめ、喜ばしむる爲に出来た、純真な面白い藝術品であります。

與謝野晶子夫人著 竹久夢二氏 裝幀及挿畫

行つて参ります

(四六判美本挿畫入 定價九十錢 送料十五錢)
間秀歌人として第一人の盛名ある與謝野夫人が其優し心をこめたお伽噺であります、實に珍らしい出版ではありませぬか、挿畫は皆様方の間に有名な夢二氏の筆に成つたもので、内容と相待つて誠に面白い、優美な此上もない書物であります

中村八郎著 岡落葉氏裝幀

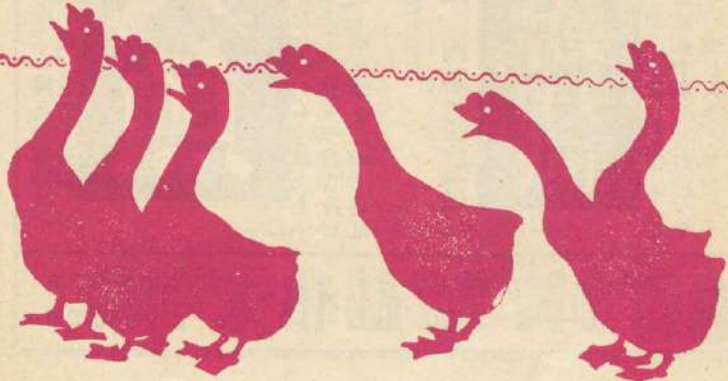
子供の喜ぶ新知識

(四六判彩色美本 定價一圓五十錢 送料十五錢)
子供の知りたがる新しい知識數十項を、わかりやすく面白く説明したもので、少し大きくなつた子供には直接読み得るやうに面白く書いたものであります。

東京市麹町區 天佑社 電話九一七三番
振替東京一〇二八番 電話九一七三番
大阪區南久寶寺町四丁目 販賣部

目次

お池のあひる(表紙・石版刷)……………岡本歸一
 あやふい三郎治(口絵・原色版)……………野口雨情
 七つの子(童話・曲譜)……………一・楠山正雄
 大國主命と八十人の兄弟……………四・羽田松雄
 歸り途(一等當選童話)……………五・沖野岩三郎
 庄屋と代官(童話)……………六・藤澤衛彦
 油賣り(童話)……………三・岡本歸一
 白鳥使者(傳説童話)……………三・岡本歸一
 お父さん馬鹿だなア(繪けなし)……………三・岡本歸一
 讀者文藝成績發表……………三・岡本歸一
 三郎治物語(二等當選童話)……………三・岡本歸一
 静枝さんと燕(二等當選童話)……………三・岡本歸一



池の小人(入選佳作童話)……………六・天江登美草
 印度イソツブ物語(童話)……………六・青柳花明其他
 二人の泥棒(童話)……………六・楠山正雄
 鏡國めぐり(長篇童話)……………六・齋藤佐次郎
 篠……………六・西條八十
 螢(二等當選童話)……………六・岸田一郎
 天(童話)……………六・野口雨情選
 お家と樹木(自由畫)……………六・山本鼎選
 木のはし(幼年詩)……………六・若山牧水選
 ベッコ登さん(綴方)……………六・青柳花明其他
 通……………六・編輯部選
 挿繪……………六・岡本歸一
 附録……………六・岡本歸一
 後の山六爺さん……………六・沖野岩三郎





あやふい三郎治

岡本錦一畫

三郎治は一生けんめい逃げましたが、たうてい
 夜叉にはかなひませんから、ちきに追ひつかれさ
 うになりました。

と、丁度道ばたに一本の栗の樹が立つてゐまし
 た。三郎治があわてゝそれへ匍上ると、後から夜
 叉も大きな口を開けて匍上つて來たのです。可哀
 さうな三郎治はどうなるのでせうか。

(三郎治物語の三十六頁を御覽なさい)



七つの子

本居長世作曲

からす なぜなくの からすはやまに
かはい ななつの こがあるからよ
かはい かはいとからすはなくの
かはい かはいとなくんだよ
やまの ぶらすへ いてみてごらん
まらいめをしいいこだよ



鳥は啼くの
可愛 可愛と
啼くんだよ

山の古巢に
いつて見て御覽
丸い目をした
いゝ子だよ



鳥なぜ啼くの
鳥は 山に
可愛七つの
子があるからよ
可愛 可愛と

七つの子

野口雨情



大國主命と八十人の兄弟（日本神話）

楠山正雄

一、白兔

素盞雄命から五代めに、大國主命といふ若い、美しい神さまがありました。八十神といつて、八十人もあるたくさんの御兄弟の中で、命は一ばんの末子にお生まれになりました。この八十神はみんな意地のわるい神さまで、始終大國主命をいぢめてばかりゐましたが、とうとうおしまひに、一ばん若い弟さまに降参して、大國主命が日本の王さまにおなりなさいました。それにはかういふお話があるのです。

その時分、素盞雄命の初めてお下りになつた出雲の國



とはすぐお隣の因幡の國に八上比賣といふ奇麗なお姫さまがありました。八十神たちはめい／＼この八上比賣をせひお嫁さまに貰ひたいと思つて、大さわぎをな

さいました。

何ろ八十人もある神さまのことですから、その中でどなたをお選びしていいのか、八上比賣の方でも困つてしまひました。そこで八十神たちは相談の上「これはいつそみんなで八上比賣の所へ行つて、だれか好きな人を一人より出して貰はうぢやないか。運よくそれに當つた人が八上比賣の婿になることにしよう。」

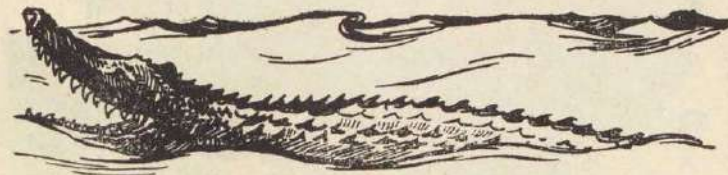
かう言つてみんなぞろ／＼出雲の國から因幡の國にかけてお出でになることになりました。その時

大國主命が、

「お兄さま、わたくしも行きたうございます。」と仰しやいますと、八十神たちはみんなばかにしたやうな顔をして、

「何だ、末ツ子のくせに生意氣な小僧だ。それよりかお前はこれでも背負つて、供をして行け。」と言つて、八十神たちの食物や衣類などを入れた大きな袋を大國主命の背中に背負はせました。大國主命はすなはに、はい／＼と答へてお兄さまの後からお供をして行らつしやいました。

八十神はやがて出雲の國を出はなれて、因幡の國の氣多の崎といふ濱邊へお出になりました。するとそこに、ひい／＼苦しうな聲を出して泣いてゐるものがありますから、行つて見ますと、かはいさうに若い兎が一匹、どうしたのか體の皮を剥かれて赤肌なまゝ、砂の上をころげまはつてをりました。



八十神たちはその様子を指さして、おもしろさうに笑つてゐましたが、中で一人一ばんいたづらな神が兎に向つて、

「ばかな奴だ。そんなに苦しがつてゐることは無い。爛れた體のすぐ元のやうになる法を教へてやらう。」と仰しやいました。

さう聞くと兎は大へん喜んで、

「どうぞ後生ですから教へて下さいまし。」と言つて、幾度も／＼砂の上にお辭儀をしました。神は勿體ぶつた顔をしながら、

「そんなことはわけはないよ。ちやあすぐと海の中へ入つて、潮水を溶びて、それから山の天邊の吹さらしの所へ行つて、風に吹かれて寝てゐるがいい。すると爛れた肌がかはいてすぐ癒る。」とお言ひになつて、またぞろ／＼行つておしまひになりました。

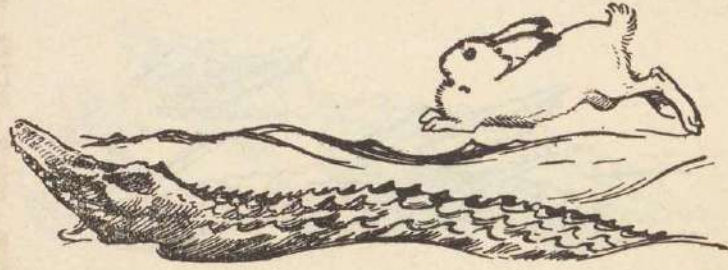
兎はいたづらな八十神たちに欺かれるとは知りませんから、すぐ言はれた通り、海に入つて潮水につかつて、吹きさらしの山の上にて寝てゐました。そのうち鹽がだん／＼乾くにつれて皮がびり／＼われはじめて來ましたから、たまりません。前よりも十倍も百倍も苦しくなつて死ぬやうな聲を出して、ひい／＼泣きながら、砂の上をころげまはつてをりました。

さて大國主命は、お兄さまたちの後からお供をしてお出でになりましたが何しろ量ばつた、重たい袋をしょつてお出でになるので、思ふやうに足がすくまず、一町おくれ二町おくれして、いつの間にかすつと後になつて、一人ぼつちとりのこされておしまひになりました。

さて命はやつと氣多の崎までお出でになりますと、赤肌にされた兎がひいひい言ひながら砂の上をころがつてゐますので、一體どうしたのだと言つてお聞きになりました。

兎は八十神たちにだまされてひどい目に逢つた話をして、またおい／＼泣きました。

「可哀さうにわるいいたづらをする人たちだ。だが一體どうしてそんな生皮を剥がれるやうなひどい目に逢つたのだね。それを話してお聞かせ。」と命はやさしくお尋ねになりました。その時兎は涙をふきながら遠い海の方を指さして「一體わたくしは隱岐の島に生れた兎でございますが、島の住ひも飽きたのでどうかして本土へ渡りたいと思ひました。それで毎日濱へ出ては、海ばかりながめてくらしてゐました。すると或晴れた日に、どこからやつて來たものか何千となく鰐がうちや／＼濱に寄つて來て、日向ぼつこをしてゐましたので、こ





れは一つこの鰐をだまして向ふへ渡つてやらうと思ひまして、
鰐さん鰐さん、かうして見てみると、お前さん方の眷族もずぶん澤山あ
るやうだね。しかしとても兎の一門の繁昌には叶ふまい。
と申しますと、鰐はやつきとなつて、

生意氣なことをいふな。たかゝこんな小ぼけな島の中に住んでゐる兎と、
ひろい海をのこらず自分の家にしてゐる鰐さまと比べものなるものか。
と怒つて申しました。わたしは心の中では占めた、と思ひながら、さも口惜し
さうな顔をして、

口だけでいくらいばつても、論より證據だ。ちやうど今日はお天氣がい
いから、この濱から向ふ岸の因幡の國までもはつきり見えるが、一つお
前さんの仲間でごゝからあそこまで橋を架けて御覽。わたしはその上を歩
いて行つてどの位あるか、一匹づゝ數へてためして見るから。

と申しますと、鰐はやつきとなつて、もうすぐと、ぞろ／＼、ぞろ／＼来るわ
来るわ、何萬何千といふ鰐が真黒に海の上を集つて来て、瞬／＼ひまに隠岐の島
から因幡の國まで鰐の背中一つに續いてしまひました。
わたくしはやつと永い間の望が叶つたものですから、うれしくつてたまりま

せん。それで鰐の背の上でびよ／＼跳ねながら、一い、二う、三いと音ひな
がらとう／＼三萬三千三百三十九まで數へて、いよ／＼一ばんおしまひの鰐ま
で来た時、黙つてゐればいいのに、ついうれしいものですから、

海の鰐はばかな奴 隠岐の兎にだまされて

因幡の國へ 橋かけた。

と言ひますと、一ばんおしまひの鰐が怒つて、いきなりわたくしをつかまへて
毛皮を剥いでしまつたのでございます。」

かういふ兎の長話をすつかりお聞きになると、大國主命はおわらひになつて、
「はッは、そんなことをするから罰が當つたのだ。よし／＼お前の體はわたし
が直してやらう。」と仰しやつて、深切に療治のしかたをお教へになりました。
それは川の水が海にさし込む川口に行つて、よく真水で肌を洗つて、そこに
咲いてゐる蒲の花を地びたに散らしてその上に轉がつてゐるのです。

兎は早速命に教はつた通りにしますと、爛れた體がすつかり元のやうになつ
て、むく／＼と毛が生えて、白い奇麗な兎の體になりました。

兎はその時大へんに喜んで、地びたに頭をすりつけて何べんも何べんも命に
お禮を申しました。

「あのお兄さまの八十神たちは、せつかく因幡の國までお出でになつても、とても八上比賣をお嫁さまにすることはできません。あなたはさうして重たい袋をしょつてお供をしていらしつても、比賣はきつとあなたのお嫁さまにおなりでせう。」

かう兎は言つて、大國主命にお別れ申し上げました。稻羽の白兎といふのは、この兎のことです。

二、赤い猪

さて八十神たちの後について、大國主命も因幡の八上比賣のところへお出でになりましたが、案の定兎のいつた通り、八上比賣は八十神たちをのこらず嫌つて、大國主命のお嫁さまになるといひました。

八十神たちはみんなでばかにして、家來のやうにひどく使つてゐた末子の命に負けてしまつたものですから、業腹でたまらず、どうかして敵をとつてや

らうと思つて、悪だくみをかまへました。そこで或日のこと、八十神たちは、山へ猪獵に行く相談をはじめ、大國主命を一しよに誘ひ出しました。命はすなほにお兄さまたちの後からついて行つて、伯耆の國の手間山といふ山の麓までお出でになりますと、八十神たちは、

「此の山の上には真赤な猪がある。それをわたしたちが行つて狩り出すから、お前はこゝに待つてゐて猪が逃げて來たらつかまへるのだぞ。若し逃がすとお前を殺してしまふから。」と脅かしたまゝ、みんなして山へ上つて行つておしまひになりました。

大國主命は逆らひもせず、言付けられた通り、たつたお一人で山の麓に待つていらつしやいますとやがて火のやうに赤い猪が山の上からころがるやうに駆け下りて來ましたから、命は兩手を開いて待ちうけてゐて、足もとへくるところをいきなり抱きつ

きました。すると赤い猪と見せたのは、お兄さまたちの計略で、ほんたうは猪の形をした大石を火で真赤に焼いたのですからたまりません。命はあつといつたまゝ、體におゆう大やけどをして、死んでおしまひになりました。命のおかあさまは刺國若比賣といふ方でしたが、一ばん可哀がつてお出でになつた末子の命が急におかくれになつたのを、大へんに悲しくお思ひになりました。それをどうかして生き返らせる工夫はないかしらとお思ひになつて、空まではるばる上がつて行つて、人間の命を掌る神産靈の神にお願ひに行きました。すると神産靈の神も大さう氣の毒にお思ひになつて、蚌貝比賣、蛤貝比賣といふ二人の女神を下界へおよこしになりました。



この蛭貝比賣といふのは赤貝、蛭貝比賣といふのは蛤のごとくでした。それで蛭貝比賣は自分の身をけすつて黒焼にし、蛭貝比賣は體から水を出して、黒焼にした貝を練つて、お乳のやうにして、焼けたゞれた大國 主命の體に塗りますと、火傷がすぐ直つてもとのやうに奇麗な男になつて、しやん／＼選者にお歩き出しになりました。

殺したと思つた大國 主命がまた生き返つて來たものですから、八十神たちはます／＼業腹でたまりませんから、また一つ悪だくみをはじめました。

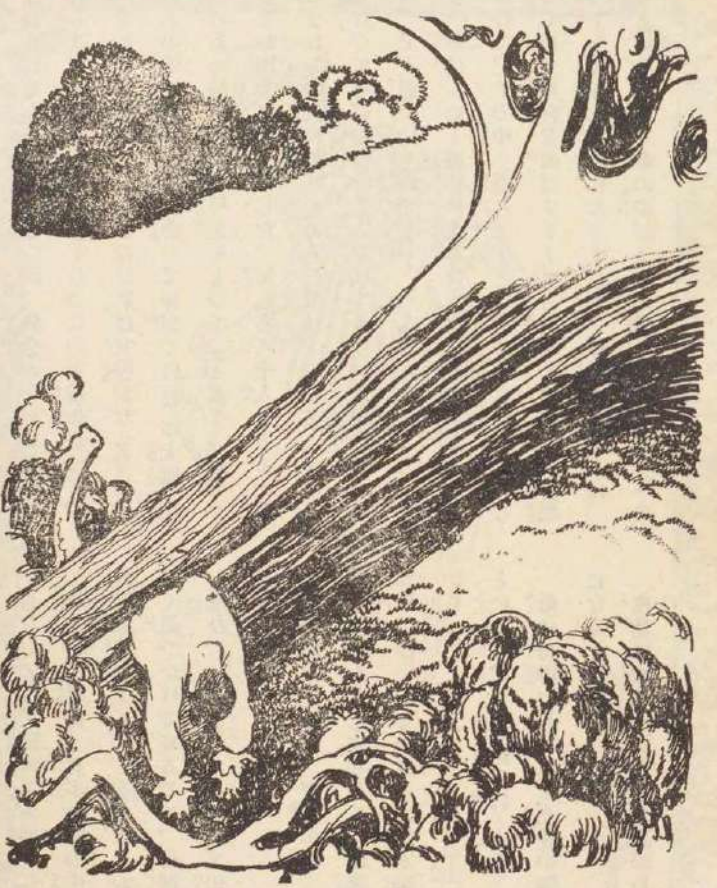
或日八十神と大國 主命も交つて山遊びにお出でになりましたが、途中一本の大きな杉の樹が真中から二つに裂けたまゝ倒れておりました。するとお兄さままたちのうち誰いふとなく、

「この樹の股をくゞつて行かう。」といひますと、みんなおもしろい／＼と賛成して、一人々々その穴を

くゞつて行きました。

一ばんおしまひに大國 主命が、くゞつてぬけようと思つて、半分體をお入れになりますと、びしりとひどい音がして、樹の裂目が一つに合はさつて、命の體をはさんでしまひました。命はあつといふ間もなく、胸をしめられて、死んでおしまひになりました。もと／＼此の樹は八十神たちの悪だくみで、樹を二つに裂いてその裂目に楔を打ち込んで、むりに口を開かせてあつたのです。それを命が入ると一しよに楔をぬいたので、樹はもとのやうに一つに合はさつて、命の體をひどく挟んでしまつたのです。

おかあさまの刺國若比賣は、せつかく助かつたと思つた大國 主命がまた見えなくなつてしまつたので大そう心配して、おい／＼泣きながら、山の中を探しておあるきになりましたが、運よく命が木の股に挟まつてゐるのを見付け出しました。そこで家來に



言付けて、樹を切りさかせて、やつと命を救出しました。おかあさまはその時大國 主命に向つて、
「可哀さうにお前もかうしてゐると、悪い兒さまたちにしまひには殺されてしまふ。もう二度が三度と重なつては、わたしの力にも及ばなくなるだらうから、今のうちに遠くに逃げお出で。」と仰しやつて、おちさまの大

屋毘古命といふ神さまのいらつしやる紀伊の國へお立たせになりました。ところが、執念ぶかいお兄さまたちは、またままとしくじつたのを残念がつて、何でも命を殺してしまはなければ我慢がならないといふので、紀伊の國に向つてお出でになる大國主命のあとから、大勢弓矢をもつて、どん／＼追つかけてお出でになりました。何しろ八十人もあるお兄さまたちの矢に射すくめられては、こんどこそどうしたつて逃げおほせることはできまいと思はれました。でも運のいゝ神さまといふのは命のことです。命はふいと道傍の大木に大きな洞のあるのを見つけて、その中へ隠れますと、洞の中は深い穴になつてゐて身輕な命はする／＼と穴をくゞつて、谷底へ下りておしまひになりました。お兄さまたちは、ちよいとの所で命の姿がふいに見えなくなつたの

で、大きわざをして探しましたが、どうしても見つからないので、諦めてお歸りになりました。かういふ風に、日本の國の中では、どんな遠くへ逃げて行つても、どこまでもお兄さまたちがしつこく追つかけて來るので、母神もすつかり困つておしまひになりました。そこで母神は大國主命をお呼びになり、

「この地の下には、夜見の國といつて、死人の行く暗い國があります。そこに素盞雄命といつて、あなたにはひいおちいさまに當る神さまがいらつしやるから、そこへ行つてよく身の上をお願ひするがいい」といつて、夜見の國へ行く道をお教へになりました。命は母神にわかれて夜見の國へ一人立つておいでになりました。

夜見の國ではどんなお話があるでせう。(つづく)



歸り途

(一等當選童謡)

羽田 松雄

下駄が 切れた
鼻緒が 切れた
己らは お家へ
歸れない
皆で見たから
切れたんだ
明日から 一緒に
遊ばんぞ



庄屋と代官

沖野岩三郎

昔し紀州の山奥に字の讀めない庄屋がありました。ある時代代官様はその村の宿屋へ泊りました。代官様今は郡長様で、その頃は大変な勢でした。

代官様はこの村の庄屋が無學だと聞いたので、假

字で手紙を書いたのです。其時代代官様は生の椎茸が食へたかつたので、

「なましいたけをもつて来い。」と書いてやりました所が、庄屋は夫れを「生しい竹。」と讀んだのです。此土地には新しいものを、生しいといふので、早速庄屋は百姓達に命令して、大きな孟宗竹を十本程斬らせて、夫れをヤンサ、ヤンサと代官様の宿へ擔いで行かせました。

代官様は吃驚して其のわけを聞きましたが、庄屋

が生椎茸と生しい竹とを間違へたのだと知つて、大層笑ひました。で、其晩代官様は、庄屋の家へ行つて生の椎茸を御馳走なつて其所へ泊る事にしました。もう十時過になつたので、代官様は何心なく、

「もう寝みますから、床を取つて下さい。」と申しました。蒲團を敷け。」と言へば解るのですが、床を取ると云はれては、庄屋に其意味が通じないのでした。で、庄屋は直ぐ大工を呼んで来て、掛物の掛つてゐる床を毀し初めましたので、代官様は周章で、

「蒲團を敷くんだよ。」と叫びました。

「アアさうですか。」と云つて庄屋は安心しましたがどうも此後どんな間違ひが起るかも知れないと云ふので、其晩直ぐ隣村へ使をやつて、隣村で一番偉い漢學の先生を備つて来て離れ坐敷へ隠して置きました。

翌る朝、代官様は起きて来ると直ぐ、

「おうい、手水をまはせ。」と申しました。

「顔を洗ふ水を持つて来い。」と云はれたなら庄屋にも解るのでしたが、「てうづをまはせ。」と聞いて何の事だやら意味が解らないので、早速離れ坐敷へ行つて、漢學の先生に、

「てうずとは何の事です？」と聞くと、漢學者、

「ちやうづとは長頭だ。長い頭だ。」と云ひました。

「では、代官様の前で、長い頭を廻はすんだなア。」と思つて、庄屋は下男の草平といふ爺さん呼びました。

此の草平爺さんは、滅法頭の長い男で、村中で福縁様といふ綽名を受けてゐました。

「おい、草平、御苦勞だが、お代官様の前に出て其の長い頭を舞はしてお呉れ、少々首が痛むだらうが辛抱してお呉れナ。」と庄屋が頼むやうに言ひました。

ので、草平は變な事だとは思つたが、謹んで代官様の前へ出て、其の細長い頭をくるり〜、けくりけくりと頻りに廻はしました。

代官様は草平が發狂したのかと思つて、大聲で庄屋を呼びました。そして段々理由を聞いて、「手水と長頭。」の間違ひだといふ事を知りました。

代官様は賢い人でしたから、これは屹度漢學の先



生が儲はれてゐるのだと知りましたので、
「庄屋殿、私は今朝サウヘイを食べたい。」と、だしぬけに申しました。

「サウヘイを食べたい。」と聞いた庄屋は、ホロ〜涙を流し乍ら勝手もとに行つて、下男の草平を呼び寄せて、

「おい草平、可愛さうだがナ。代官様が、お前を食べたいと仰しやる。まさかお前の身體を皆な食べきれないだらうから、痛からうけれど辛抱して、片手片足位は我慢して代官様に食べさせて上げてお呉れッ。」と泣き乍ら頼みました。

草平も主人の頼みですから、已むを得ません。頬べたに幾節も涙の谷を作り乍ら、恐る〜代官様

の前に出ますと、代官様

は、

「サウヘイばかりでは、甘しくないから、ヅフォンへ砂糖を交せてもつて来い。」

と云ひました。

草平が勝手もとへ行つて主人に其事を申しますと、庄屋は早速學者の所へ行つて、

「ヅフォンとは何の事ですか？」

と尋ねますと、

漢學者は少し怒つたやうに、

「馬鹿！ 今朝教へてやつたぢやないか。ヅとは頭の事ぢや。フォンとは粉ぢや。」



と云ひました。

「えッ、頭を粉にするんですか。」と云つたまゝ庄屋は坐敷へ飛んで歸つて、

「お代官様、どうぞ草平の頭を粉にして食べる事だけは御免下さい。」

と言つて、わあ〜ッ！ と其所へ泣倒れました。

代官様は笑ひ乍ら、

「泣くには及ばないよ、草餅へ豆粉をつけて食べた」と云ふのだよ、蓬餅を搗いて、夫れへ豆の粉をつけて来るんだ、砂糖を入れる事を忘れちゃいけないよ。」

と優しく云ひました。(をほり)



油賣り

昔、支那に名高い弓術の先生がありました。或日弟子を伴って射的場で弓を射てゐましたが、弟子は十本の矢を射ても的の中へは四五本しか入りませんでした。けれども先生の矢は十本の中で八本までの的に中りました。

弟子達は「さすがに先生だ。」と云つて、感心しました。

に引立てました。

「俺を駄目だと言つたのは貴様か。」と先生は眼を瞋らして叱りつけました。けれども爺さんは平氣で、「駄目ですなア、あなたはマダ——餘程勉強しなくちやアなりませんよ。」と言ひました。

「では十本の矢を十本とも皆能的に中て、見る！」と言つて、弓術の先生は弓と矢とを爺さんの眼の前

にさしつけました。

「夫れはいけません、私はマダ一度も弓の稽古をした事がありません。若し私があなた程に稽古をすれば、私は十本は愚か、百本の矢を百本とも的の真中に中てて見せます。私の専門は油賣りで弓術ではありません。」と申しました。

「夫れならば貴様の専門の油賣りで、どんな修業をしたのか。」と先生は呶鳴りました。

そこで油賣りの爺さんは財布の中から一つの穴あき錢を取出して其れを小さい徳利の口に載せました。「あなたは弓を射て的中する事が商買です。私は斯うして毎日油を徳利に注いで賣るのが商買です。だから私は、今此の錢を些とも濡さないやうに、徳利の中へ油を入れて見せます。夫れは二尺上からでも三尺上からでも、あなたの仰せの通りに致しますから。」

した。

所が其時垣の外で、此の射的を見てゐた一人の油賣りの爺さんが、

「まだ——此の先生も駄目だワイ。」と嘲るやうに言ひました。

すると夫れを聞いた弟子達は大層腹を立て、爺さんを先生の前

爺さんは油樽の中から一升辨に一杯油を汲んで夫れを右の手に持ちました。

「では三尺上の方から其の徳利の中へ油を注いで見る、そして徳利の口に載つてある穴あき錢をちよつとでも濡したなら貴様の生命は無いぞ！」

弓術の先生は刀に手をかけて斯う言ひました。「畏りました！」と云ひながら爺さんは、一升辨の隅から、糸のやうに油を流しました。たら——と流れる油の糸は錢の真中にある四角な穴から、する——と徳利に入りました。そして一升の油が樹の中に一滴も無くなりましたが、錢の四角な穴の周囲は、ちよつとも濡れてゐませんでした。

これを見た弓術の先生は、刀を地の上に投げ出して、油賣りの爺さんに謝罪しました。そして一生懸命に弓術を勵みましたので、後には百發百中の名人になつたといふ事です。(をばり)



二
この暑いのに火を起してお湯を沸すなんて、いやな事であんまりいゝ返事なぞする春雄さんちやないのですが、この時はやはり元氣のいゝお返事をして、臺所で玉の汗を流し乍ら一生懸命しちりんの下をあふいでお湯を沸しました。

お母さまが、大きな一升瓶をきれいに洗って下さいました。それから紅茶とお砂糖を入れて、サア、よし出来たと瓶へつがうとしますと、ふいにお父さまに、「馬鹿！ 馬鹿！」と、どなられて春雄さんびつくり。



お父さんバカだなア

(跡)

一
ある日、ハワイの伯父さまから小包が着きました。

あけて見ると中から出るは出るは干ぶだう、干あんず、いちじくのさたうづけ、パイナプルお菓子、紅茶、春雄さんの好きなものばかり。お父さんは一つ一つ下さつて、

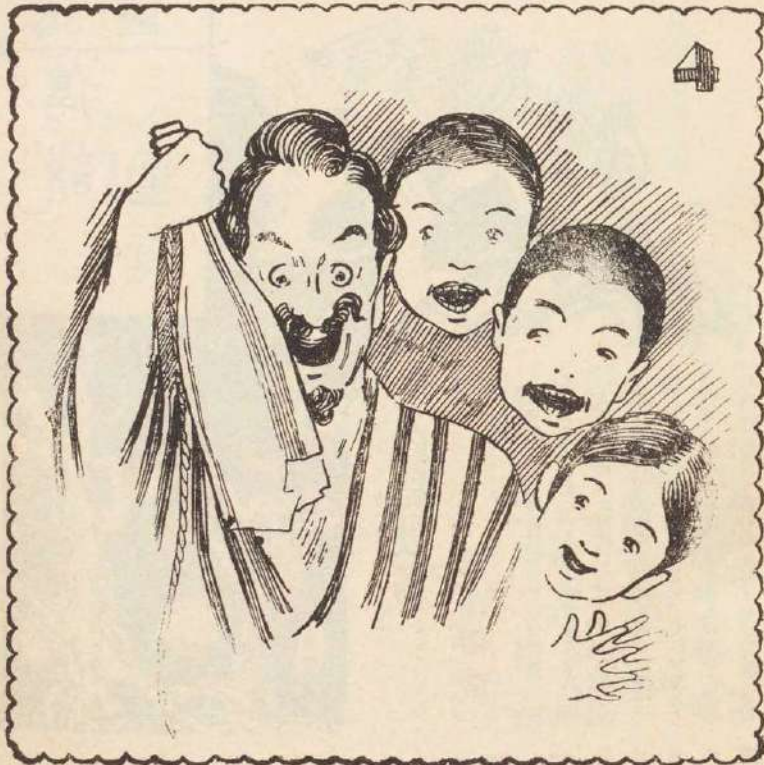
「あとお晝のお茶うけにこの紅茶を入れて井戸で冷して置いて皆で一緒に食べよう」とおつしやつたので、皆賛成！賛成！

「春雄は湯を沸せ」ハァイツ



3

三
 「馬鹿！ 春雄お前はよつほど馬鹿だなア、こんなに煮えくり返つて居るものをいきなりつけたら、瓶がびんと破れるぢやないか、大馬鹿三太郎だなア」
 なるほどさうだとお父さまに云はれて気がついた春雄さん、あんまり食たたいので、すっかり忘れて居ました。
 瓶を温めてから紅茶を入れて栓をしつかりして細引を結びつけて春雄さんが井戸へつるしに行きました。
 お庭の堀井戸は随分深くてそれは冷い水です。春雄さんでは仲々重たいので閉口して居ます



4

四
 すると、お父さんが「どれわしが下げてやる」とするくと下げて瓶の底が水へついたらたん、びんと音がして破れました。皆アツと云つたさき、春雄さんは、
 「お父さんよつほど馬鹿だなアそんな熱いのを、いきなり冷い水へ入れればびんといくのは當り前ですよ。大馬鹿三太郎だなア」と云ひますとお父さんに、
 「人のまねするものぢやない」とにらまれましたが、何日も程こはい顔ぢやありませんでしたお父さんも、きつと、餘り早く食べたいので忘れたんでせう。おかしいな、大人のくせに。」

國語
傳説
童話



白鳥使者

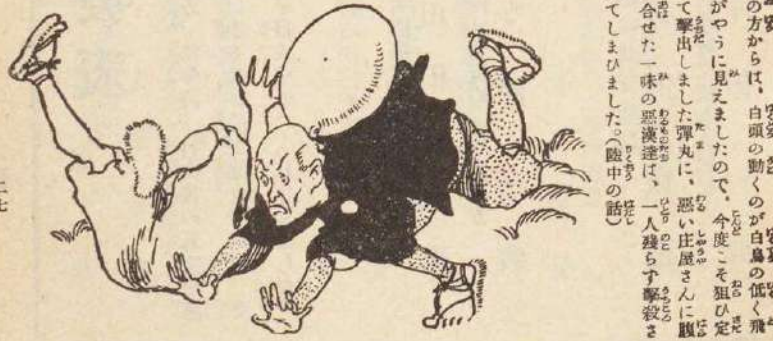
藤澤衛彦

二子村の白鳥神社はあたらかな神様で、何事によらず、正しい人達の味方なされ、悪い人には戒めのお告があつて、其人の心の改まらない間は、其人の髪を白く染めてしまふといふ事でございます。それが恐ろしいので、村の人達は、誰も彼もお互ひに戒めあつて、夢にも悪い心を起さないやうに心掛

けましたので、村中は、皆正しい善良の人達ばかりになりました。
その頃、白鳥神社の境内には、澤山の白鳥が棲んでゐて、神様の御用萬般を足してをりましたが、水いこと、もう悪人に戒めの御告を齎すといふやうな御用もなく、たゞ村の子供達のよい遊び相手になつてばかりをりました。
ところが、或頃、此村から大して遠くもない村の庄屋さんで、大層白鳥の料理を好いてゐる者がありました。どうかして毎日のやうに白鳥の料理が食べたいと思つてをりました。段々に近所に白鳥が居なくなり、それが皆和賀の二子へ移つて行つてしまふと聞きまして、或日、白鳥を獲して二子村へ出かけて行きました。
ところが、土地の人達は神様のお使ひだからと言つて、どうしても撃つことを許さませんでした。
腹黒い庄屋は、それを大變に根に持ちまして、謀を設けて、二子村の白鳥を一度に、



突らす撃つてやらうものと、御領主様に勤めまして、或日、二子村指して白鳥獲に出かけました。
庄屋一味の悪漢共は、道案内として、先に立つて行きましたところ、やがて二子村近くにかゝりますと、蓋が上の方を、白鳥の一群が飛んで過ぎるやうに思はれましたので、皆は空の方を見上げました。併し、もう姿は見えなくなつてをりましたので、何方へ飛んで行つたかと考へながら、顔を見合ひしましたが同時にお互ひの顔を見ますと、「おやつ」と、思はず聲を上げて驚かすにあられませんでした。それも其筈です、庄屋一味の悪漢共の髪は、皆一律に真白けに變つてしまつてゐるのです。
その時、後の方で、ボンボンといふ鐵砲の音が致しました。案内されて來ました隣りの御領主様の家來共は、庄屋一味の悪漢共の頭を白鳥だと思つて、鐵砲を打ち出したのです。庄屋一味の悪漢共の驚きは一通りでありません。忽ち逃げ走りましたが、それが又



讀者文藝募集當選發表

三月號以來全國の誌友諸君と愛讀者諸君に豫告して、童話、童謡、綴方、幼年詩、自由畫の五つを募集いたしました。諸君の熱心と努力は短日月のうちに、殆ど一萬に近い多くの作品が集まりました。各選者は、幾日もくかゝつて、嚴選に嚴選の結果が、いよゝゝ左の當選を發表することになりました。

童話

三郎次物語 (壹等當選賞金六拾圓) 名古屋市南區熟田白鳥町一四六 内田方 山田三太郎

靜枝さんと燕 (貳等當選賞金貳拾圓) 東京深川區元加賀町一八高野方 寺岡一義

童謡

歸り途 (壹等當選賞金參拾圓) 下總國結城郡五箇村 羽田松雄

篠螢 (貳等當選賞金拾圓) 東京市外杉並村天沼七九杉村方 岸田一郎

綴方

ベツコ釜さん (壹等當選賞「ガリバア旅行記」) 長野縣下伊那龍丘小學校 土屋衛次

いちめる女 (貳等當選賞「頬白の歌」) 茨城縣眞壁郡若柳小學校尋六 栗野とく

芳一の萬年筆 (參等當選賞「ふるさと」) 長野縣諏訪郡永明小學校尋五 名取重榮

木のはし (壹等當選賞「ガリバア旅行記」) 福井縣大飯郡高濱小學校高一 胡間六郎

葉つばの行列 (貳等當選賞「頬白の歌」) 山梨縣北巨摩郡小淵澤小學校 名執代介

とけい (參等當選賞「ふるさと」) 東京深川區西町三十四 坂田艶子

自由畫

家ト樹 (壹等當選賞「ガリバア旅行記」) 愛知縣海部郡彌富小學校尋二 川崎春義

イヘ (貳等當選賞「頬白の歌」) 山梨縣西八代郡上九一色小學校尋一 土橋小春

筆筒 (參等當選賞「ふるさと」) 山口縣玖珂郡由宇村 木浦亮



三郎次物語 (一等當選童話)

山田三次郎

むかし、三河の國に三郎次といふ若者がゐりました。両親もなく、家も貧乏でしたから、京の都へ行つて、出世をしたいと思つて村を出ました。

東海道を西へ毎日々々歩きますと、後になり先きになり行きあふ母娘の旅人がありました。お互ひに友達ほしい時なので、三郎次はこの母娘とすつかり仲好くなりました。この二人は伊勢詣りに行く途中で、母親は四十過ぎの人の好い人で、娘はまだ十七八の美しい娘さんでした。

三郎次は道つれが出来たので、それから毎日の旅が大變愉快になつて、同じ宿屋に泊つては、楽しく日を送りました。その内に娘の母親が三郎次に頼んでいふのは、「私達と一しよに、お伊勢様(大神宮の事)を参詣なさいませんか。女ばかりの旅で、心細くて、仕方がありませんから。」と、淋しさうにいふので、三郎次もその氣になつて、伊勢路を廻つて一しよに大神宮を参詣しました。

ければならない事になりました。その晩も同じ宿屋に泊つた三人は、お互に別れを惜んで、三郎次は今迄話さなかつた身の上話などをしました。

「まア、そんなにお氣の毒なお身の上なのですか。是非一度私の家へ来て下さいまし。きつとお世話をいたします。」と、母娘が涙さへ浮べていつてくれたので、三郎次もうれし涙をこぼしました。

三郎次はその晩おそく床に就きました。目を覺した時は、お日様がかん／＼照つてゐました。見ると、母娘がゐるので、吃驚して宿屋の番頭さんに訊いて見ると、お連様は三日前の朝お立ちになりました。實はあなた様が三日三晩つゞけてすやく／＼眠つてゐらつしやるので心配してゐたのです。」といひました。三郎次はがっかりして、

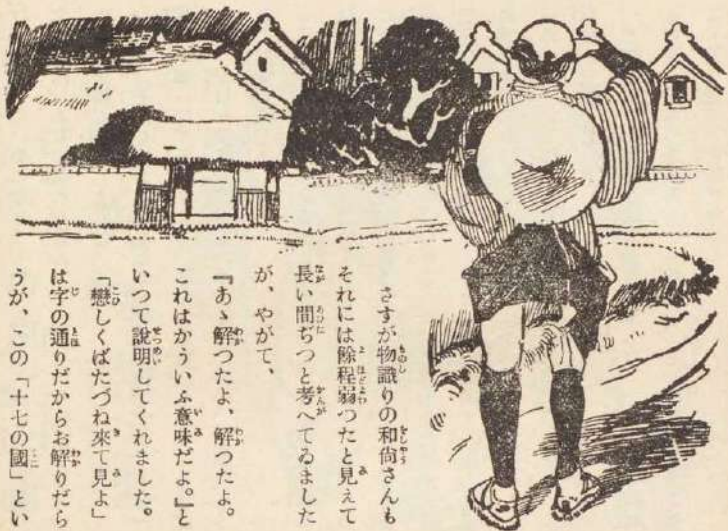
「あ、それではまた自分の病氣が出たのだな。」といつて溜息をつきました。三郎次には不思議な病氣がありました。三日三晩の間死んだやうになつて眠るといふ病氣で、その間は幾ら起されても目を覺さないのです。

三郎次はうつつかりして、母娘の故郷の、ころを聞いて置くのを忘れました。明日の朝こそ別れる前に聞かうと思つたのに、眠つて了つて聞きそくなつたのでした。

三郎次は起上る勇氣もなかつかりしてゐましたがふと枕を上げると、紙切れに何か文字の書いてあるのが飛んで出ました。何んだらうと取上げて見ると、

戀しくばたつね來て見よ十七の國。降ればさす降らねばさ、ぬ町をすぎ、千年萬年腐らぬ橋を渡り、雨露をしのぐ土を焼く家で聞け、軒のまはりに底なし柄杓に子の子右衛門

と、書いてあります。判じ文みたいなので、さつぱり譯が解りませんが、たしかに娘が書置いて行つたものに違ひありませんから、三郎次は宿屋の主人の處へ行つて訊いてみました。しかし、主人にもさつぱり解らないので、「これは、この先きのお寺の和尚さんの處へ行つて判じておもらひなさい。和尚さんは大變な物識りですから。」と、教へてくれました。そこで、三郎次はすぐとお寺へ行つて和尚さんに見せました。



さすが物識りの和尚さんも
それには除程弱つたと見えて
長い間ちつと考へてゐました
が、やがて、
「あ、解つたよ、解つたよ。
これはかういふ意味だよ。」と
いつて説明してくれました。
「懇しくばたつね来て見よ」
は字の通りだからお解りだら
うが、この「十七の國」とい

ふのが難しい。十七は若いといふ事だから若狭の國だらう
「降ればさす降らねばさぬ」は傘のことだから傘町
を過ぎて行けといふ意味で「千年萬年くらぬ橋」といふ
のは石橋といふ事だから、傘町を過ぎて石橋を渡りなさい
といふのです。「雨露をしのぐ土を焼く家」といふのは瓦
を焼く家の事だから、その家で聞いて見ろといふのです。
「軒のまはり」は暖簾の事で、「底なし柄杓」といふのは、
柄杓に底がないと後に残るのは柄と側だけだから江川で、
子の子右衛門は孫右衛門の事です。つまり江川孫右衛門と
書いた暖簾がかゝつてゐるといふ意味に違ひない。」

かういつて和尚さんが、すつかり唄の意味を判じてくれ
たので、三郎次はとび立つ様に喜んで、すぐ様若狭の國を
さして出立しました。

いく日かの旅の後で、三郎次は漸く若狭の國へ入りまし
た。行つて見ると、成程唄の文句にある通り傘町を過ぎ
ると、石橋がありました。それを渡ると、瓦焼きの家があ
りましたから、そこのおかみさんに尋ねると、すぐとわか
りました。孫右衛門の家は土蔵造りの田舎にはめづらしい

豪家でした。三郎次は今更ながら驚きました。

しかし、折角来たものですから、恐る／＼門口に立つて
取次を頼みますと、間もなくお母さんと娘さんが、びつこ
りして出て来て、

「まあ、こんな遠くまでよく尋ねて来て下さいました。」と
いつて、夢ぢやないかと喜びました。そして草鞋をぬがせ
たりして三郎次をいたはりました。

その時、孫右衛門も奥から出て来て見ると、見知らない
若い男だものですから、苦い顔をして、

「これ／＼、何だつて見す知らずの人を家へ上げるのだ。」
と、いひました。母親は、とりなすつもりで「伍一仕の話
をしました、頑固な孫右衛門は、

「いゝや、私の家には色々大事な物があるのだから、見す知
らずの者を上げる事は出来ない。」と、怒鳴る様にいひまし
た。三郎次がおどく／＼してゐるのを見た娘は何と思つたか、
「お父さん、この方はお年は若くても、それは偉い武術の
先生様なんですよ。」と、いひました。

すると、孫右衛門の様子ががらりと變つて、「ナニ、武術

の大先生だつて、そんなら何故さうと早くいつてくれな
いのだ。」と、今度は叱るやうにいつて、そこへベタリと坐つ
たかと思ふと、ビヨコ／＼お辭儀をしました。

孫右衛門は日頃から大變武藝の好きな男なので、武藝家
をこの上もなく偉いものと考へてゐたのです。

三郎次はあつげにとられてゐましたが、今度は孫右衛門
が下にも置かなくもてなすので、たうとう泊つて厄介にな
る事になりました。

それから四五日たちました。ある日のこと、孫右衛門が
恐る／＼三郎次のところへ来て、

「先生、面白い事になりました。この城下には彌五郎と
いふ武藝の達人がおりますが、その先生があなたの評判を
聞き、是非明日弓試合をしたいから馬場まで来てくれと
いつて参りました。」と、かういひました。そして、もう竹
矢來まで造つて切りと支度をしてゐるのだと話しました。

三郎次はびつくりして顔色を變へました。娘の嘘かもと
で大變な事になつてしまつたと思ひましたが、今更試合を
しないともいへないので、

「真敷い、試合をしてやりませう。」といひました。さアその時から三郎次は心配で壊らなくなりました。もつと百姓の息子で何一つ武藝らしい事を習つてゐない者が、どうして試合に勝てる譯がありませう。大勢の見てゐる前で赤恥をかゝなければなりません。

三郎次は困り切つて、思案にくれてゐましたが、どう考へてもこつそり逃るより外に仕方がないので、その晩の中にさうすることに決心しました。

三郎次には、真夜中の來るのがどんなに待遠しかつた事であらう。やがて夜もふけたので、三郎次は恐る／＼床から起上つて、逃げ支度をしました。その時ふと、上を見ると長押しに太い弓がかゝつてゐました。三郎次は思はず、

「あゝ、あゝ。」と深い溜息をつきました。

「自分もせめて弓の一つも習つて置いたらよかつたらうになア。」と、獨言のやうにいひました。すると、妙に誘はれるやうな氣がして、三郎次はつう／＼長押の弓をそつと下して、自分で手に持つて見たのです。それから今度はそこにあつた矢を番へて見ました。しかし、太い強弓です。

から三郎次の様な力のない男には到底十分に引く事は出来ませんでしたが、それでも夢中になつて、うん／＼絃を引きました。

すると、どうしたはずみだつたのでせう。

「ビーン……」と、絃音がしたかと思ふと、矢は物凄く音をたて、天井板を突破して、何處かへ飛んで行つてしまひました。あまりの物凄く音なので三郎次は眞青になつて、そこへ倒れて了ひました。もう恐ろしくて逃出す事も出来なくて、布團をかぶつたまゝぶる／＼顛へて、たうとう夜を明かしてしまひました。

翌朝になると、家中がひつくり返るやうな騒ぎです。

「昨夜の矢が間違ひを起したのだな。」と思つて、三郎次は生きた色もなく布團にもぐつてゐました。それから暫くすると、孫右衛門が羽織袴姿でふすまを開けて入つて來たのです。孫右衛門は三郎次の枕元に兩手をついて、

「大先生様、何とも御禮の申やうがございません。」といひました。三郎次には何かさつぱり解らないので、恐る／＼布團から首を出す。



「ウーン」と一聲叫んで、死んでしまつたのでした。

この話は忽ち町中の評判になつて、遠く城下までも廣まりました。

城下から程遠くない村に大きな山がありました。其處には昔から夜叉が住んでゐて村の子供をとつて食べたり、作物を荒したりしてゐました。しかし、誰一人退治する者がないので困り切つてゐた處へ三郎次の話を聞いたものですか、村人達はすぐさま大勢してやつて來て、自分達の難儀を救つて貰ひたいと思ひました。三郎次は、今度こそいよいよ逃げるより外ないと思つたので、村人に向つて、

「よろしい、私が退治してあげる。しかし、それには幾日も

「昨夜は先生がおるで下さつたばかりに、危く金倉を泥棒に破られる處でありましたのを、巧く射殺して下さいましたので、幸と助かりましてございます。實に先生のお腕前には恐れ入りました。彌五郎先生もこの話をきき、とてもあなた様にはかなはないから今日の試合は止めにしてくれといつて、逃出したさうでございます。」といつて、孫右衛門は幾度かお辭儀をしました。

それもその筈です。三郎次が引いた矢は天井の裏板を突抜き、家根を突抜いて、丁度その時一人の泥棒が孫右衛門の家の大事なく、金倉の土臺下を掘つて、身體を半分中へ入れた處へ落ちてお尻の真中を射貫いたので、泥棒は

山にこもらなければならぬから、蕎麥粉一斗と、大きなおむすびを十ばかりと草鞋を五六足と、のへて下さい。」と、いひました。

村人は大喜びで、すぐいはれた通りの物を揃へて持つて来ましたから、三郎次は蕎麥粉を背負つて、おむすびと草鞋を腰に下げ、いよく山越しに逃げる支度をしました。それから孫右衛門が、この間の弓と矢を持つて来たので、途中で捨て、しまふつもりで、それも仕方なく持つて、三郎次はいよく出立する事になりました。

村の人達は途中まで送つて来ましたが、峠まで来ると、向ふに見える深い森を指さして、「天先生様、彼處の森に夜叉が住んでゐるのです。私達は、こゝでお別れ致します。」と、いつて歸つて行つて了ひました。

三郎次はたうとう一人になつてしまつたので、怖くて、堪りませんでした。森を通らなければ山が越せな

たまらなくなつて、むせながら木から降り落ちて、地面へばつたり倒れました。この隙だと思つた三郎次は、急に元氣が出て、持つてゐた矢で目といはず、身體といはず、めちやくくに突刺しました。流石の夜叉もたうとう死んで了ひました。

三郎次は思ひ掛けない功名をしたので、これならわざ／＼山を越して逃げるにも當らないと再び孫右衛門の家へ歸つて来ました。

村の人達は三郎次が夜叉を退治たと聞いて躍上つて喜びました。

「皆さん、あの森へ行つて見てご覧下さい。」

と、三郎次がいつたので、村人達は大勢かたまつて山へ行きました。



と、成程、三郎次が持つて行つた矢が一本残らず夜叉の身體に當つて死んでゐるので、いよく三郎次の腕前に感心してしまひました。

村人から此話を聞いた孫右衛門はどんなに喜んだでせう。

孫右衛門は是非かういふ偉い人を自分の家の婿にしたいと思つたので、三郎次の前へ行つて兩手をついて、「どうぞ、お願ひでございます。娘の婿になつてやつて下さい。」と、いひました。

三郎次も、前から娘の親切なこゝろを嬉しく思つてゐましたから、すぐと承知をしました。

その後、三郎次は美しい娘さんと一しよに大層楽しく暮したといふことです。

(なほり)



いので、とほ／＼と歩きました。と、たうとう森の中へ入りました。三郎次はぶる／＼顔へながら愈ぎ足に歩くと森の奥で「がさ／＼」と木の葉を踏む足音がするのです。

「そら、出たぞッ。」

と思つた三郎次は、顔色を變へて駈出しました。

出て来たのは本當に夜叉でした。三郎次は一生懸命逃げました。しかし、到底夜叉には敵ひませんから、間もなく追ひつかれさうになりました。

と、丁度道端に一本の栗の樹が立つてゐるので、三郎次はあわて、それへ匍上りました。夜叉も大きな口を開けてつゝいて樹へ匍上つて来たのです。

その時、三郎次の背負つてゐた蕎麥粉の袋の口が栗の枝にからまつたので、紐がとけて、

「パッ！」

と一度に蕎麥粉が飛散つたのです。蕎麥粉は夜叉の口といはず、目といはず、鼻といはず一度に入りました。夜叉は、苦しくて



入選佳作童話

野口雨情選

お池の小人

仙臺 天江登美草

見つけた見つけた
お池の小人
なーんの蓮の
葉の上に
ちよこんと坐つた
雨蛙。

港の子

東京加藤葉二

小舟はゆられて
沖に出る
舵とる子供は
港の子
右舵 左舵
港の子

いたち

群馬青柳花明

あそこの星敷に
犬がゐる
跡は畑に來なかつた
鶏ほしくも
來なかつた

鳳仙花

東京坂田露香

お庭の鳳仙花
ほろりこほろりこ



静枝さんと燕

(二等當選童話)

寺岡一義

去年の夏、四度目の夏休暇を迎へた静枝さんが、大學へ行つてらつしやる兄さんや女學校へ通うてらつしやるお姉さん達と一緒に、海邊の村に避暑に行つて、散々泳いだり、貝を掘つたり、ボートに乗つたりして遊んで歸つた時の事でした。離座敷の軒下で可愛い子燕の聲がして居るのを聞いた静枝さんは、飛立つ程嬉しかつたのです。縁側に安樂椅子を引出して其上に立ち首を長くして燕の巢を仰ぎ見ました。親燕が何か御馳走を捕つて歸つて來ると、五羽の子燕はしきりにチー／＼といつて黄色な嘴を開きました。二羽の親燕は、外へ飛んで行つては御馳走を捕つて來て、交る／＼子燕の口に入れてやるのでした。

静枝さんは、それが無暗に可愛くてならないものですから、毎日安樂椅子の上に乗つては脊伸びして見て居るのでした。所がある日の事です。静枝さんが、何時もの通り安樂椅子の上に乗つて、一心に燕の巢を見て居ますと、俄かに「危いッ！」と言つて、ソツと後から抱止める者がありました。静枝さんは吃驚して「アッ！」と叫んで抱止められた人の顔を見下すと、それは静枝さんの好きな兄さんでした。其兄さんはカラ／＼と笑つてゐらつしやいました。静枝さんは「アラ、兄さん」と言つたけれども、次の言葉が直ぐにはつけませんでした。其時はまだ胸がドキ／＼して居たからです。すると兄さんは、「静ちゃん、お前頭に燕の糞が掛つてるよ。」と真面目な顔で有仰つて、又カラ／＼とお笑ひになりました。静枝さんは又ビツクリしました。そして、「ほんと？、兄さん」と云ひつゝ、安樂椅子から飛下りると、二三度頭を振つて見ました。けれど燕の糞は落ちませんでした。「顔をあげた静枝さんは、再び兄さんに押捺れた事に気がついて、「アラ、兄さんでは、意地悪ねえ」と言つてキツト睨みつけました。けれど其顔は笑つて居ました。其時暑い夏の陽が、漸く西の山端に落掛つて居ました。安樂椅子に腰を掛けられた兄さんは、側に立つた静枝さんの爲めに、イロ／＼と燕のお話を聞かせて下さいました。そして「あの燕の足に糸を括つておいて御覽、死なない限り必ず來年もやつて來るから……」と有仰ひました。静枝さんは怪訝さうな顔をして、「アラ、さう？、兄さん」と訊返しますと、兄さんは

日が暮れる
雀はさびしかる
親なし雀
お庭の 鳳仙花

お星様

長野 木下 右治

お星様と

三日月様が並んだ

お星様にや水かけろ

三日月様にや綿かぶしよ

つばくら

東京 鈴木 満

ついくー つばくら

腹掛けお干し

よく日が照るよ

洗濯争貸そか

月夜の雨

福島 今福 一雄

銀々小雨

一本橋かけた

三本橋かけた

お月さん 雨の

一本橋渡れ

小鳥

神戸 小山 水紅

チチク チツチ

チツチチ

向うの山でチツチチツ

小鳥の子供が

チチクチツ

はらこめさま

東京 木谷 末次郎

「ほんとだとも、吃度歸つて来るよ」と言葉に力を入れて有仰いました。
静枝さんは、また擲捨れるのか知らと思つて、向も不審さうなお顔をして居ると、
「ほんとだよ、静ちゃん」兄さんは静枝さんの手を握つて有仰るのです。

子燕はズン／＼大きくなつて行きました。そして間もなく一人で外に飛んで行つては御飯を飯べたり遊んだりして歸る様になりました。所が何時の間にか五羽の子燕が一羽減り二羽歸らぬ様になつて、お終ひには只一羽しか歸つて来ないやうになりました。静枝さんの心配は一通りではありません。あまり心配でならないものですから、兄さんにその事をお話すると、兄さんは「それはもう一人前の燕になつたから、何所かへ巢を造つてるのだらう。それとも死んだのかも知れないねえ。」と有仰いました。静枝さんは残念に思ひましたけれど、仕方がありません。残つた一羽を非常に可愛がつてやつてゐました。

或日の事、静枝さんがお復習を済して縁側に出て見ますと、子燕が巢の椽にシヨンボリと立つて悲しさうな顔をして居ました。静枝さんは心配して「どうしたの？ 燕さん、何所か悪いの。」と訊きますと、子燕は下を向いて

「お嬢様、有難うございます。お嬢様のお情深いお心には私全くお禮の申しやうもございませぬ。誠に有難うございます。」と丁寧に挨拶するのです。静枝さんは「アラ、燕さん、今更そんな事言はなくていいのよ。エ、どうしたの。何か悲しい事でもあるの。早くお話さないよ」と尋ねると、小燕は悲しさうな顔に笑を浮べて

「ではお嬢様お話しします。實は今日私は一人で遊びに出ました。そして、お美味い御馳走を見つけて、電線に止つて食べようとして居ますと、俄かに後から私の脊に飛掛つて来た悪い友達が、私の持つてる御馳走を捕つて食べようとするのです。私は一生懸命に逃げました。けれど私よりも力の強い友達、私の首に傷を負せて、おまけに逢々御馳走もとられて了ひました。私残念でなりません。」と物語りしてホロ／＼と涙をこぼしました。それを聞いた静枝さんは氣の毒に思ひました。

「アさう？ それはほんとにお氣の毒ねえ。傷が痛いでせう。私治してあげるからサア下りてゐらつしやい」と親切に云つてやりますと、子燕は静枝さんのお膝の上にソツと



はとめさまえ
はとめさまえ
かはいい小さい
はとめさまえ
お耳をお貸し
お目をお貸し

螢

京都 高橋元一郎

親はわからず 家はなし
ながす涙に火は消えて
やがて淋しい草原の
露の葉末に死んでゆく
ひとりほつちの螢

煙草

熊本 小野哲夫

いつぶく いつぶく
のましやんせ

ここらで東京が
見たうござる。

焼野の蕨

山梨 高橋十成

焼野の蕨
けさ出た蕨
頭を下けて
泣き出しさうに
お母さんも見えぬ
お父さんも見えぬ

ひよつこ

姫路 東口くにを

ピョ〜ピョ〜
ひよつこが
蚯蚓を一匹とりました
雀がくはへて
逃げました

下りて来ましたから細い指先で傷を見てやりますと成程首から血が流れてるました。

「悪い燕ねえ、ほんとに、お待ちよ。私お薬を持って来てつけてあげるから。」

静枝さんは静かに子燕を安樂椅子の上を下しておいて、藥局へ走りました。静枝さんのお父さんはお医者様でしたからどんなお薬でもお持ちでした。藥局には兄さんが調薬のお手傳ひをして居らつしやいましたので静枝さんは燕の事をお話しますと兄さんは、「それは可哀さうだ、これをつけておやり」と云つて赤い粉のお薬を下さいました。静枝さんはお薬を頂くと急いで安樂椅子に歸り、顛へて居る子燕をお膝に乗せて「ほんとに可哀さうねえ」といたはりつゝ、丁寧に薬をつけてやりました。そして其晩は柔い綿で巢を造り、それに子燕を寝かして静枝さんの枕許に置いて休みました。静枝さんの親切によつて、子燕の傷も間もなく全快いたしました。そして、又元の通り外へ出て遊ぶやうになりました。

永い夏休暇も過ぎて静枝さんが學校へ行くやうになり、次第に風が冷くなつて来る頃、燕はみんな遠い外國へ歸つて行かねばなりません。

静枝さんは、仲好しの子燕と別れるのが悲しくつてなりませんから、明日はいよいよ歸るといふ日、子燕をお膝に乗せていろ〜と物語りするのです。

「燕さん、あなた何所の國へ歸るの。」

「お嬢様、私はアメリカへ歸ります。アメリカは私のお父さんや、お母さんの生れた所ですから。」

「アメリカへ？ 遠い國へ歸るのねえ。」

かう云つた静枝さんは、ほんとに力抜けたやうに吐息しました。すると燕は「お嬢様、私は何時までもお嬢様のお側に居たいのですけれど、私達は寒い所では生きて行く事が出来ないのです。ですから、來年暖かくなる頃は又屹度歸つて來ますから、どうかそれまでお待ち下さい。ねえお嬢様、私は日本で生れたのですから私の爲めには日本が故郷です。」と、優しく慰めました。

「ではね燕さん、私待つてから必ず來年歸つて頂戴よ。ア、さう〜、燕さん、私兄さんにきいたの燕さんの足に絆を括つて置くと、來年來るのが屹度分るつて仰つたわ。濟ないけれど、私あなたを忘れない爲めに、さうさして頂戴ね。」

静枝さんが首を傾けてかう云ひますと、燕は「よろしうございます。どうぞお括り下



夕やけ

京都田和千穂

かん／＼赤い
夕やけだ

赤着物ひろけて

はしてゐる

鳥が貰ひに

飛んでつた

山焼

東京水島國雄

ほう ほう

山焼け

木が焼ける

見る間に一山

焼け切つた

渡り鳥

神戸二瓶慶子

南のお國から

海を越えて 何百里

山を越えて 何百里

電信柱に飛んで来た

燕のお母さん

夕方

横濱新居雄登

歸ろ 歸ろ もう歸ろ

「蛙が鳴くから」もう歸ろ

蛙が鳴いたと

云つて歸ろ

蛙の傘

東京伊藤温子

蛙に傘ささせませう

大ばこばこの傘を

蛙にささせて

歩かせませう

さい」と云つて、左の足を差延べました。其所で静枝さんは、紅い絹絲を持つて来てクル／＼と足に巻つけて「痛かない？」と訊きますと「いゝえ、ちつとも」と燕は莞爾して足を引きました。そして名残惜しうに静枝さんのお顔を眺めるのでした。其翌日、子燕は二羽の親燕と一緒に静枝さんのお家を出て行きました。静枝さんは離座敷の縁側に立つて、何時までも其行方を見守つて居ました。

其年が暮れて今年も又風が暖くなつて来ました。

ある日の事、不意に一羽の子燕が静枝さんのお家へはいつて来ました。それは間違ひもなく左足に紅い絹絲を括られた燕でした。静枝さんの喜びは一通りではありません。「まア、ほんとによく歸つて来て呉れたわねえ、私、心配してゐたのよ。去年歸る時もしか海にでも落つちて死ぬやうな事はないだらうかと、それはく／＼心配してゐたのよ。でも嬉しいわねえ、歸つて来てくれたもの。ほんとに大きくなつたわねえ」と、膝に抱上げて、つく／＼と其顔を眺めるのでした。燕もまたなつかしさうに静枝さんのお顔を見つめて居ましたが、

「お嬢様、私もアメリカに居る間、どんなにお嬢様の事を氣づかつたか知れませんが、けれどお嬢様、私はほんとに幸福者です。アメリカでも丁度お嬢様のやうなおやさしいお嬢様のお家で御厄介になつて、可愛がつて頂きました。」と言葉を切つて、

「あア、忘れて居ました。其お嬢様は是非一度日本のお嬢様にお目に掛りたいと有仰つて、今度私が出て来る時も、幾度も幾度も必ずす宜敷く云つて頂戴よつて、此手紙を私の足に括られたのです。」と、云ひつゝ、右足を差出しました。

静枝さんはイソ／＼しながら括られた小さい紙を解いて開きました。けれどそれは美しい文字が横に書かれてあつたので、静枝さんには讀みませんでしたから直様お姉さんのお部屋へいつて、御勉強中のお姉さまに讀んで頂きました。其お手紙には、

美しき日本の少女静枝さま、これから後、どうぞ私と仲よくして下さい。さうし、此可愛い燕を可愛がつてやつて下さい。 アメリカのアリスより

と書いてあつたのです。静枝さんはお姉さんから此事を讀んで聞かされた時、どんなに嬉しかつたか知れませんが、それから後、静枝さんは一層燕を可愛がるやうになりました。燕は何時の間にか二羽になりました。それはお嬢さんを迎へたのです。

静枝さんは毎日々々アリスさんの事を考へて居ました。そして今度燕の歸る時にはどんなお手紙を送らうかと氣に掛けて居ました。其内今年も又夏休暇になりました。

ある日の事、静枝さんが安樂椅子に腰を下して燕の歸つて来るのを待つて居ますとお庭の方で賑やかな人聲がしましたので、ソツト立上つて植込の中から透して見ると其所には一脚のテーブルが持出されて浴衣の人が二人向合つてビールを飲んで居ました。一人は兄さんで、今一人は兄さんのお友達で法科大学の學生さんでした。

お二人のお話が如何にも面白さうなので、静枝さんは聞くともなく耳を傾けて居ますと、何の事だか分らないけれど、頻りに「ハイニチハイニチ」と云ふ言葉が使はれて居ました。そして兄さんのお口から「實際、アメリカ人の氣が知れないねえ」と云ふ言葉が出ました。

それを聞いた静枝さんは、何んだか急に淋しくなつて来ました。そして安樂椅子の側に立つたまま、ボーツとして外を眺めて居ました。(をばり)

命の物語

物の命

楠山正雄

世界がはじめて出来たとき、神様は動物を集めて、みんなの壽命をおきめになりました。第一番に出て来たのは驢馬です。
 『驢馬、お前は三十年も生きたいんだらう。』と、神様は仰しやいますと、驢馬はびつくりして、
 『どうして三十年も毎日毎晩重い荷物をしよばされたり、ぶたれたり、叩かれたりひどく、追ひつかはれてはたまりません。』
 と、申しました。そこで驢馬の命は十八年と短りました。次に出て来た犬も三十年と聞いて、不服さうな顔をしながら、
 『三十年なんて第一足がつまきません。牙が利かなくなるし、吠えることが出来ないで、片隅にうづくまつて、始終うゝ、うゝ唸つてゐる外はなくなるでせう。』といひました。
 そこで犬の命は十二年にへらされました。三番目に猿が出て来て、やはり齒をむき出しながら、
 『わたしは何にもしないやうでも、この通り齒をむき出して、人間に笑つて見せるだけでも大した骨折です。』といひました。



そこで猿の壽命は、すつとへつて十年になりました。

一ばんおしまひに出て来たのは、若い丈夫さうな人間でした。人間は少し怒つたやうな元氣のいゝ聲で、

『神様、わたしは三十年ばかりでは困つてしまひますよ。それでは木にたどへていへば、やつと芽がのびて、葉が出て、花が咲いて、これから實にならうといふ時にほつりと折られてしまふやうなものです。もつと長くして下さい。』といひました。

神様はにっこりお笑ひになつて、

『ちやあ驢馬の命の十八年を加へて上げよう。』と仰しやいました。

『それではまだ足りません。』

『ちやあ犬の十二年を加へてやらう。』

『もう少し長くして下さい。』

『ちやあ猿の十年を加へてやる。』

それで人間は、ふしやうに引下りました。かういふわけで人間は自分の壽命の三十年に、驢馬の十八年と犬の十二年と猿の十年を加へて、都合七十年生きることになりましたが、初めの三十年だけが、人間に花の咲いた時の、幸福と希望の外に何にも知らない一番愉快な時代です。それから十八年は驢馬のやうに、人のために使はれて兩方の肩に重い荷物をしよばされて、毎日毎晩働きつめに働かなければなりません。そのあとの十二年は犬のやうに、何事にも目を見張る癖ばかりのこつても、齒がないので、片隅にうづくまつてうるさく唸るばかりです。さておしまひの十年は、子供が阿呆のやうになつて、猿のやうにおどけたおぢいさんになるのです。





二人の泥棒

齋藤 佐次郎

「チュエノと「禿鷹」の二人の大泥棒は、丘の上の絞首臺の傍を通りかゝりますと、幸にも人影がなかつたので、しばらく立止つて見てゐましたが、

「首をくゝつたら、どんな氣がするのせうね。私が先きにやつて見まかすら、よかつたらあなたも後で試してご覧なさい。」とチュエノがふいにいひ出して、絞首臺の綱を自分の首に巻きつけました。それから「禿鷹」に綱をひつぱつて貰ひたいといひました。

てチュエノを下におろしました。チュエノはヒョロ／＼しながら地面に立つて、

「あゝ、氣持ちだつた。首をくゝる氣持ちはまた格別ですな。」といつて、さも氣持ちがいゝやうな風をしました。そのくせ、顔が眞青になつて息もハア／＼いつてゐるのです。

「親方はまだこの氣持ちは知らないのせうね。もし知つてゐれば、私を先きにやらせる譯がないんだから。私は愉快でたまらなかつたので、脚を振つたのですよ。あなたもやれば、きつと脚を振るでせうよ。」

「フーン、そんなにいゝ氣持ちなら、俺も一つやつて見ようかな。」たうとう「禿鷹」がいひ出しました。

「だが、綱の結目だけはしつかり頼むよ。落ちたりすると大變だからね。」

「よござんすとも、しつかりやつて置きます。それから疲れたら口笛を吹いて下さいよ。すぐ下へ降しますからね。」

さういつてチュエノは「禿鷹」を、／＼吊上げたのです。綱がとゞだけ高いところまで行つた時、

「忘れちゃいやですよ。下へ降りたくなつたら口笛を吹く

いたづらにかけては大好きな「禿鷹」のことですから、うん／＼いつて引張りました。

「親方、あきたら私が脚を振りますから、さうしたら下してくれなければいけませんよ。」

「いゝとも、／＼。」

といつて「禿鷹」はもう一度力をこめて綱を引きました。

それから一分もたつたでせうか。チュエノの脚がふらふら動き出したのです。

「はッは、下してくれといふんだな。」

「禿鷹」はかう獨言のやうにいつて頼れた通り綱をゆるめ

んですよ。それからいゝ氣持ちになつたら、私がやつたやうに脚を振つて下さい。」

と、チュエノが叫びましたが、まだその言葉が終らない内に「禿鷹」の脚が動きはじめました。最初は前と後に振つてゐるだけでしたが、おしまひには、我慢出来なくて蹴るやうに動きましたから、チュエノは面白くてたまらないやうに、アツ／＼いつて笑出しました。

「ハ、ハ、ハ、ハ、實に面白い、ハ、ハ、實に滑稽だ。親方下へ降りたくなつたら口笛を吹くんですよ。」

しかし、たうとう口笛はなりませんでした。間もなく脚も動かなくなつてしまひました。その筈です。「禿鷹」は死んでしまつてゐるぢやありませんか。首をくゝられながら口笛が吹ける道理がありません。これは、みんなチュエノが初めからたくらんでやつた仕事なのです。

こんな譯で「禿鷹」も死んでしまつたので、チュエノはたうとうこの國第一の大泥棒になつてしまひました。

二

それからいく年かたちました。チュエノには何百人とい

ふ大勢の弟子が出来たので、この大勢の弟子の小泥棒たちをつれて悪い事をして廻りました。そのうち、たうとう王様の金倉へ泥棒に入つたので、王様は大變に驚かれて、澤山の兵隊をくり出し、泥棒達を捕へようとなさいました。ところが、いくら長い間かゝつて、どんなに手をつくしても捕へることが出来ないのです。王様はやつきになつて大臣を呼んで相談をなさいました。この大臣は大變に賢い



ユエノの頬へ墨をつけました。ユエノは少しも知りませんでした。をどりの相手にはぜひ王女様になつてもらはうと思つてユエノがつか／＼と行くと、銀の鏡に自分の顔が映りました。何気なく見ると、ほくろのやうに墨がついてゐるではありませんか。

ユエノは驚きました。一體誰がこんなまねをしたのだらう、どういふ譯でしたのであらうと考へて見ると、すぐその譯がわかりましたから、

「フ、ン」と、あざ笑つて、わざと平氣をよそほつて、王女様のところへ行きました。そして、王女様が自分をすつかり氣に入つてしまふほど、上手に踊りました。

踊りがおしまひになつた時、ユエノは王女様にお禮をいつて、そこを出て、もう一度舞踏室の入口のところへ来ました。そこでは、まだ大勢の人が、わ／＼が／＼騒いでゐたので、その人混みの中へ行きました。大臣がまだゐましたから、ユエノはわざと傍へ行つて、持つてゐる墨壺を盗んで、そつと大臣の顔へほつ／＼と二つところ墨をぬつたのです。

人でしたから、

「今度、あの大泥棒のゐる地方の人間を一人のこらす舞踏會へお呼びなさいまし。すると、あの大膽な泥棒の事ですから、その中に入つて来て、こつと王女様と一しよにをどりたいと申し出るに相違ございません」と、いつて、その後で何か秘密のことをひそ／＼と王様に申あけました。

「フ、ン、お前の考へはい、考へだな。」

と、王様が仰つたので、すぐと御殿で大宴會を開いて大勢の人を呼んで、舞踏會の催しをする支度をしました。王様から招待された人たちは、大喜びで一人残らず集つて来ました。いふまでもなく、大泥棒のユエノもその中に入つてゐたのです。

その衣のお客たちは、ほしいと思ふだけの物を飲んだり食べたりしてしまつたので、いよ／＼舞踏室へ入つて行きましたが、何百人といふ人ですから、大變な混雜でした。

舞踏室の入口で、俄かに押あひがはじまりました。その際に利口な大臣は、着物の下に小さな墨壺を隠して置いたのを出して、ユエノが傍を通つたのを見て、ヒョイとチ

それから猶ほかに、そこゐた十九人の男の顔にも、自分と同じやうに墨をつけて置きました。さうして置いて、墨壺はもと／＼どほり大臣の着物の中へ入れてすましてゐました。

三

その後で、ユエノはもう一度王女様のところへ行つてをどりの相手を探しました。王女様は笑つて承知してくれましたが、その時、ユエノは鞆のリボンが解けたので結ばうとしてかゝむと、その間に王女様は大臣から頼まれて持つてゐた墨壺を出して、ユエノの頬へ墨をつけました。

しかし、王女様は大臣のやうに上手ではありませんでした。ユエノは、王女様の指がさしたのを氣付きました。そこで、ユエノは二度目の踊りが終つたとき、王女様の懐から墨壺を盗んで、さつきの十九人の男達の顔に、もう一ヶ所づゝ墨をつけて置きました。それから大臣の顔には、もう二つおまけにつけて、墨壺を王女様のふところへ返しました。



さて、舞踏會もたうとうをはりに近
きました。王様は家來たちにいひつけ
て、舞踏室の扉をばた／＼一度に閉め
させてしまつて、姫に墨を二所つけて
る男を探せとおいひつけになりました
た。侍従たちは、眼をギョロ／＼させ
て、驚いてゐる人達の中を見て歩きま
すと、すぐと見つかりましたから、そ
の男を捕へて王様の前へ引つぱつて行
かうとしますと、また同じやうに墨を
つけた男がゐるのです。
ところが、一人や二人でなく、まだ
他にも、まだ他にも、たうとう二十人
になつてしまひました。その上驚いた
のは、大臣までが墨をつけてゐるの
です。おまけに四つもつけてゐるではあ
りませんか。

めんくらつた侍従たちは、王様のところへ飛んで行つて
この由を申しあげましたから、王様は驚いて大臣と王女様
をお呼びになりました。

「泥棒はお前の墨壺を盗んだに進ひなからう。」と、王様は
大臣に仰つしやいました。

「いゝえ、どういたしまして、この通りこゝにごさいます。」
大臣は墨壺を出して見せました。そこで、王様はこんどは
王女様に向つて、

「それなら泥棒は、お前のを盗つたに違ひない。」
と、仰つしやいました。

「いゝえ、父様、私もこの通りこゝに持つてをります。」
といつて、王女様も墨壺を出しました。

王様は、ながい間黙つて考へてゐましたが、「これをやつ
た男は、どんな人間よりも利口なやつだ。もし、その男が
自分だと名乗つて出れば、姫と夫婦にして私が生きてゐる
間はこの國の半分を治めさせ、私の死んだ後では全部を治
めさせたいと思ふ。舞踏室へ行つて、このことを觸れて歩
いて、その男をこゝへ連れて來なさい。」と、いひました。



家來たちは、さつそく舞踏室へ行つて
王様の御命令をふれて歩きました。と
ころが、其男はたつた一人ではなくて、
二十人の者がみんな一度に出て來て、
「私が、あなたの仰しやる人間です。」
と、いつたので家來はめんくらつて、
「王様の御前へ、みんないつて來なさい。」
といひました。

二十人の中の誰が本物であるか、そ
れを決めるのは王様でも難しいこと
でした。大勢の家來を呼んで、相談なさ
いしましたが、いくら會議を開いても纏
りがつかないので、たうとうお終ひに
は、富籤でも引くやうにこんな事を決
めました。

「先づ一人の女の子をお城へつれ
て來て、王女様がその子に林檎を渡す

のです。すると、女の子は林檎を持つて、墨をつけた二十
人の男の前へ行つて、その内の誰か一人にやるのです。林
檎をもらつた者が誰であつても、その男が王女様のお婿さ
んになるのだといふのです。——
「勿論、そんな方法では本當の人間にはぶつからないかも
知れない。しかし、ぶつかる事もあるだらう。どつちにし
ても、今のところそれより他に仕方がない。」

と、王様が仰つたので、王女様は少女をつれて、二十
人の男がゐる部屋へ行きました。二十人の男は丸く輪にな
つて坐つてゐました。少女は男たちの真中に立つて、一人
一人の顔を眺めてゐましたが、その内に、つか／＼とチュ
エノの前へ行つて、林檎を渡したので、皆なは、
「ツアッ」と、叫んで立上りました。

チュエノは、その時、手に大きな金の指輪をはめてゐま
したから、侍従が、
「お前さんは、他の者が持つてゐないやうな物を持つてゐ
てはいけません。」
といつて、指輪を抜かせて他の者が坐つてゐる場所をかへ

させました。

その後で、もう一度少女がその部屋へつれて来られました。ところが、少女は矢張りチュエノに林檎を渡しましたから、侍従は王様のところへチュエノをつれて行つて、「少女が二度とも選んだのは、この男でございます」と、申しあげました。

たうとう、チュエノは王女様のお婿さんになつて、その翌日は結婚式を挙げるになりました。

六

いく日かたちました。ある日のこと、チュエノは王女様と一しよにお城のお庭を歩いてゐますと、いつか知らない間に、高いお城の崖の上へ出てしまひました。そこは大泥棒たちを倒さに吊してつき落す處だつたのです。チュエノは崖の上に立つた時、思はず深い溜息をつきました。

「あ、私の母親はいつも私に向つてかういつたのだつた。お節はお終ひにはこの崖の上から倒さに吊されて下の岩に落ちて死ぬのだと。」

チュエノは、誰にいふともなくいひました。しかし、今

チュエノは大泥棒どころか、この國の王子ではありませんか。して見ると、母親が口癖のやうにいつてゐた占者の言葉は大嘘だつたのでせうか。

チュエノは、其時急に思出したやうに、王女様に向つて、「あ、こゝに丁度いゝ綱があるから、これで私を崖の上から吊して下さい。どんな氣持ちがするかやつて見よう。それに私は、自分の運を試しても見たくなつたから。」と、いひました。

チュエノは、自分で本當に崖から吊下つて見て、占者のいつた癡言をあざ笑つて見たく思つたし、それにもとくの悪戯好きな性分からこんな事をして見たかつたのです。王女様は、笑ひながらそんな危い悪戯は恐いから止めて下さいといひましたが、チュエノがきかないのですからたうとう王女様もおしまひには、面白半分の氣になつて、「ではやりませけれど、すぐと上つて下さいね。」と、いひました。

チュエノは、足首に太い綱を巻きつけて、お城の崖の上から真倒様に吊下りました。王女様はくすく笑ひながら



か一ぱいに綱を握つてゐました。しばらくしてから、

「あ、面白かつた。もういから上げておくれ。」と、チュエノが叫びました。

ところが、その瞬間です。お城が火事だ！と、嗷鳴る聲がしたので、王女様はびつくり

して、黒煙の立つてゐるお城の方を見ましたが、ふいに手の力が抜けたので、

「あッ！」と、いふ間に、チュエノは岩の上へ真倒様に落ちてしまつたのです。チュエノは頭を割つて、またたく間に死んでしまひました。

たうとう占者のいつた事が本當になりました。チュエノは偉い出世をしました。でも、おしまひは大泥棒たちと同じ最期をとけたのでした。(をばり)

鏡國めぐり (長篇童話)

西條 八十

十二、ジヤミの日

ダムとチーがあわて、逃げてゆくうしろ姿を、あやちやんはボンヤリ見送つてゐましたが、そのうちあたりはますます暗くなり、風がヒュー／＼木の葉を鳴らしはじめました。ものすごい景色のなかにひとりぼつちと残り残されて、あやちやんは急にさびしく泣きたいやうな氣になりました。



枚の肩掛がヒラ／＼と飛んできて、あやちやんの足もとに落ちました。

『おや！ こんなものが！ 誰のでせう？』

あやちやんはかうひとり言を云つて、その肩掛をひろひ上げました。さうして向を見ると、今しもダイヤの女王が両手を一杯にひろげて、何か飛んでゆくものを追かけるやうにこちらへ駆けてくるところでした。あやちやんはていねいにお辭儀をして、女王にそれを獻げました。

『ちやうどわたくしが居まして、ほんたうにようございましてわ。』

と、あやちやんは云ひながら、女王のうしろへまはつて肩掛を着せかけました。

ダイヤの女王はひどくびつくりしたやうな、また情ないやうな顔つきでジロリとあやちやんを見ましたが、あとは獨りで何かわからないことをモグ／＼

口のなかで言ひつゞけてゐました。あやちやんがよく耳を澄ませると、それはどうも、

『バンとバタ、バンとバタ。』

と、云つてゐるらしく聞えました。

『女王様、これでよろしうございますか？』

あやちやんは肩掛をちやんとピンでとめてしまつてから、かう訊ねました。それでも女王はやつぱり

『バンとバタ、バンとバタ。』

と、言ひつゞけるだけでした。

『バンとバタ、バンとバタつて、いつたいこの人はお腹でも空つてゐるのかしら？ するぶん妙だわ。』

と、あやちやんは心のなかでをかしく思ひながら、今度は女王の風でクシャ／＼になつた髪の毛を、自分の櫛で梳いてあげました。

『さあ、これですつかりよくなりました。』

と、あやちやんはまた言つて、

「でもほんたうはあなたにはお腰元が入りますわ。」
するとこの時、何思つたか、女王が急に口をきいて云ひました。

「わたし、お前を雇つてやつてもいいのだよ。お給金は一週間十銭で一日置きにジャミをあげるよ。」

「あやちゃんはこれを聞いておもはず吹き出しさうになりましたが、がまんして、

「いゝえ、あたし雇つて頂かなくつてもいいので、それにジャミも欲しくありませんから。」
と、ていねいに断りました。

「そんなことを云ふけれど、それは上等なジャミだよ。」

と、女王はまた云ひました。

「え、でもとにかく今日は入りませんから。」

と、あやちゃんがまた断りました。

「だつてお前、いま頼んでおかないと、もう貰へな

かないから、さう云ふことがわからないのだよ。」

と、女王は今度は聲をやさしくして云つて、

「おまへには、今までにあつた事だけしきや記憶えてゐられないのだらう？」

「それはさうですわ。今までに無いことなんか記憶えられやしませんもの。」

と、あやちゃんが答へました。

「さう、それだから何もわからなくなるのだよ。わたしなんぞはこれから起る事まで記憶えてゐられるのサ、まあ云つて見れば、この次の水曜日にはどんなことが在るといふことまでチャンと記憶えてゐるのだよ。」

女王はかう説明しながら、手提靴の中から大きな膏薬を出して、人差指に貼りはじめました。

「この人、怪我もしないのにどうして指に膏薬なんか貼るんだらう？」

くなるよ。チャンと規則があるのだから。それには、明日もジャミ、昨日もジャミ、けれど今日と云ふ日にはジャミをやることにならない、と定めてあるのだよ。」

と、女王が云ひました。

「でも、時々今日がジャミの日になる筈ですわ。」
と、あやちゃんが反對しました。

「いゝえ、そんなことはありません。」
と、女王は言ひはつて、

「一日おきにジャミをあげるのだよ。今日が決して一日おきになりつこはないぢやないか。」

「あやちゃんは、なんだか女王のいふ理窟がゴタゴタして、ちつともわからなくなりました。そこで、

「あたし、どうもよくわかりませんわ。」
と云つて、それなり黙つてしまひました。

「それはね、おまへの記憶が片つぼだけにしきや働

と、あやちゃんは變におもひながら、女王のすることを黙つてチツと見てゐました。

「ところがね、おまへなんかは——」

と、女王はなほもあやちゃんに話をさかせようとして、

「おゝ、おゝ、おゝ、指から血が——。おゝ、おゝ、おゝ。」

と叫びだして、右の手をちぎれるほどひどく振りま

十三、奇妙な店

女王の聲があんまりキイ／＼聲で、それこそまるで汽車の笛のやうでしたので、あやちゃんはしばらくの間両手で耳をふさいでゐましたが、やつこのことで、

「まあ、どうなさいましたの？ 指でもお怪我なさ



「いまして？」
と尋ねました。

「よあ！」

あやちやんは女王の云ふことが一々變つてゐるの
で、又もや吹きだしさうになりながら、

「では何時ごろお怪我をなさるはずですか？」
と訊きました。

「もうぢき又肩掛が外れて、それを止めるときに、
きつと襟止で指を突くだらう。おゝ、おゝ、おゝ。」

女王がこの言葉を云ひ切るか云ひ切らないうちに
肩掛の襟止が外れましたので、女王は夢中でそれを
抑へようとなりました。

「アラ、あぶない！」

と、あやちやんが聲をかけました。

けれどもその途端に、襟止のピンは女王の指にグサ
と刺りました。

「どうだね。お前、これでさつきわたしが指から血
が出るといったわけがわかつたらう。この國では誰

「なにもまだ怪我しやしないのだよ。だが、もうぢき
に怪我をするだらう——。おゝ、おゝ、おゝ。」

でもかう云ふ風にチャンと後で起ることまで一々記
憶えてゐるのだよ。」

と、女王は、ニコ／＼しながら説明しました。

「でも、なせ今度はさつきのやうにお聲をお出しに
ならないんですか？」

と、あやちやんは、いざとなれば直ぐにまた耳を押
へる用意をしながら訊ねました。

「だつてもう出すだけの聲はさつき出してしまつた
もの。もう一べん繰返したところでしたかたが無いぢ
やないか。」

と、女王が答へました。

この時どうやら森の中がだん／＼明るくなつてき
ました。

「キツト鴉が飛んで行つてしまつて、お天氣がよく
なつたのだわ。まあ嬉しい。あたしもうこれぎり夜
になつてしまふのかと思つてゐたのに。」

あやちやんは、ひどく元氣づいてかう云ひました。
「そんなに嬉しいかえ？」
と、女王が訊ねました。

「えい、それは嬉しいございますわ。」
と、あやちやんが答へました。

「そんなに嬉しい？ うれしい？
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い」

「……い、い、い、い、い、い。」
なんだか話半分で、女王の聲は
だん／＼妙ちきりんになつて、お
しまひには長く／＼ひつばつて、
まるで羊の聲のやうに聞えました
から、あやちやんはびつくりして
女王の顔を見ました。



六二
みると女王は急に羊の毛皮を着たやうに見えま
した。

「おやツー」

と、思つて、あやちやんは眼をこすつてからもう一
べん見なほしました。

あやちやんには、何が何だか

一向わかりませんでした。

自分はいま、で女王とこんなお店の中で話してゐ
たのかしら？ それとも今まで話をしてゐた相手
は、この帳場の向ふに坐つてゐる羊だつたのかし
ら？ 何べん目をこすつて見てもあやちや

んはまるで合點がゆきませんでした。

自分は、いつかうす暗い小さなお
店の中におゐて、帳場のテーブルに兩
腕をかけてゐました。そして、向き
合ひの椅子には、年よりの羊が腰を
かけて、せつせと編物をしながら、をり
をりその大きな眼鏡ごしに、あやちやんの顔を
ジロ／＼ながめてゐました。

「おまへさん何か買ひたいのかね？」
と、やがて羊は編針を下に置いて、あやちやんにかう
言葉をかけました。



「あたし、まだ分らないのよ。」

と、あやちやんはおとなしく羊に返事をしました。
それから、

「よければ、あたしずつと一まはり見たいわ。」
と、云ひました。

「それはお前さんの前のところなり、兩側のところなり、勝手に見てもいゝさ。だけど後の方まではねお前の脊中にでも眼が無ければずつと一まはりは見わたせまいよ。」

と、羊が言ひました。

あやちやんは妙に理窟ばつたことをいふ羊だと思ひましたが、いかにもその通り自分には後に眼がありませんから、うしろの棚だけはふり返つて見ることにしました。

店の棚にはどこもこゝも一杯にひどく變つたものが並んでゐるやうでしたが、その中でも殊に奇妙なのは、あやちやんがどこか一つの棚をていねいに見ようとすると、その棚は見る／＼うちに空っぽになつてしまふのでした。そのくせ、その隣の別の

棚にはのりきれないほど品物がたくさんに載つてゐるのです。

「こゝの品物は人の顔さへ見れば、どこかへ飛んで行つてしまふのだわ。」

あやちやんはあつちこつちの棚を見ようとしてはさん／＼失敗つたあとで、かう口惜さうに言ひました。

その品物はどれもキラ／＼光つてゐて、人形のやうにも見え、またきれいな手箱だの、欲しい學校道具だの、やうにも見えました。

そしていつもあやちやんがデツと見てゐる棚の上か、下か、又はお隣の棚には一杯に並んでゐるのでした。

(あやちやんはこの店でどんな不思議に逢ふでせう。)(つゞく)



篠 螢

(二等當選童謡)

岸田 一 郎

お脊戸の
篠 螢

螢の提燈
豆提燈

消しても
豆提燈

消しても
豆提燈

また點く

自由畫「家ト樹」(一等)

愛知縣彌宮小學校尋四

川崎春義



入選佳作童謠

野口雨情選

お天氣

仙臺 錫木 碧

いたちがならんで
藪のぐるり廻つた
お天氣よいかから
面白がつて廻つた

すみれ草

茨城 高橋 五村

たんほの たんほの
すみれ草
雲雀にお手紙
出して御覽
遊びにおいでと出して御覽

蛙

東京 中澤 信三

殿様蛙
もんどりうつて

ぐわつぐわア
ぐわつぐわア

スイ〜蟲

愛知 神原 直逸

スイ〜蟲は
何にかなし
葉かけに火影に
何にかなし
お盆の提灯何にかなし

ごんび

東京 小泉 南彌

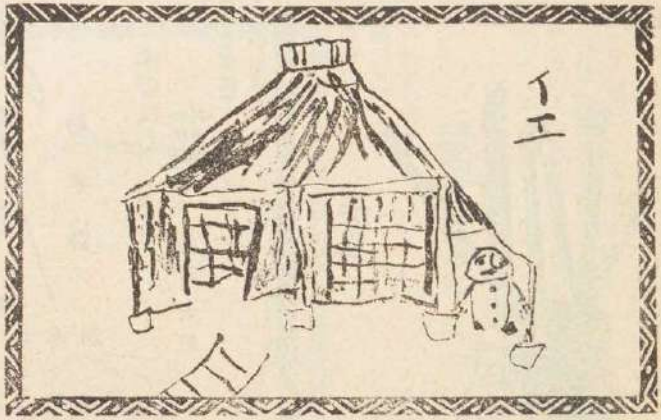
菜畑の上で
ビーイ ヒヨロ
ビーイ ヒヨロ
とんびが丸い輪をかいた

猫

越後 赤澤 芳榮

親猫アあんよで
顔洗つた

イエ



自由畫「イエ」(二等)

山梨縣上九一色小學校尋一

土橋小春

すずめ

東京 森田 晋

仔猫もあんよで
顔洗つた
日南に並んで顔洗つた

お星様

金澤 川崎 慶二郎

すすめ すすめ
茶色の帽子
鳥打ち帽子
麥藁帽子

鍛冶屋

山口 末廣 薫雄

お星様 おちて來な
一つづ、おちて來な
犬なお盆で
受けてとつて煮て
食べよう

バチ〜パツチン

ひばり

京都 近江谷 益代

ひばりのお父さん
あんまりあがると
泣つて こけて
空へ おつちるぞ

胴あげ

岐阜 近藤 九葉

子供のお胸あけ
大きい子はやめよ
小さい子はあけよ
お星様にあげてやれ

十錢札

東京 平賀 恒太郎

風呂屋の番頭さん
お色の黒い
十錢札が
縛をかけて お縁に來たよ



幼年詩

若山 牧水 選

木のはし (二等)

若狭國大飯郡 高濱校高一 胡間 六郎

波うちぎはで
まるい小さな

木のはしが
波のうつたび
ころりく
ころけてた。

評、ほんたうに子供でなくては出来ないう
たで、そして大人も及ばない佳い所がある。
君のはたいてい佳いが次ぎのなども葉敵な
ものだ。とほくの神で、風が吹いたら、青
いろの海が、みどり色に變つた。(牧水)

葉つばの行列 (二等)

山梨縣小淵澤 山梨校尋五 名執 代介

葉つばの行列やつて来る

一番先が柿の葉
二番目のが栗の葉で
三番目のは銀杏の葉
一番後からちよこ〜と
頭の小さい足長の
松の葉つばがやつて来る
評、これもすくたうただ。美しくて上品
で、そして大人に出来ない可笑しみが含ま
れてゐる。(牧水)

とけい (三等)

東京深川小 坂田 鮎子(十三)
學校六年生

小さい針よ
大きい針と
いつしよに
ぐるく

まはつてごらん

評、それは無理です艶子さん、いつしよに
くるく〜廻つたら、時計はこはれて、あな
たが朝寝をなさるでせう。(牧水)

學校

長野縣下伊那郡 飯田町土井尋四 安達 菊江

雨の降る日の



(等三)「筒筆」畫由自
亮 浦 木 村良由郡可玖縣口山

學校は

長いなあがい かさだなに
かさがきれいに ならんてる。

評、見たまふだけれど、それが美しいうた
になつてゐる。(牧水)

しゆろの木

若狭國大飯郡 高濱校高一 川端 喜一

高いしゆろの木
外國の木に似た
しゆろの木

上に少し葉が
扇のやうについて居る

評、りつばな扇です、よく斯う正直にこまか
にその木の姿を歌ふとが出来ました(牧水)

春

長野縣上水内郡 豊岡小學校尋五 池田 量禧

春になつた
木は葉を出した
よい色だ

評、さうだ、まつたくよい色で、そしてよ

いうた。(牧水)

お山の杉

千葉郡山武郡 東金小學校尋五 安田 衆子

お山の杉が
子供と大人とだきあつて
一しよに風を
にらんでる

評、杉の木と杉の木、杉の木の赤らやん、
かあさんにだつこして、のびく大きくな
つてくれ。(牧水)

小つばめ

東京芝罘片門 前町一ノ四 渡邊 貞一

キチキチキチと
小つばめさん
腹がすいたか
ひもじいか
もすこし静かに
まつて下さい

評、もすこし静かにまつて下さい。はたい
へんよかつた。さう云つてるあなたの顔が
見える様です。(牧水)

夕焼

六九



「けい花」畫由自
節 下 竹 一高院學子女心聖市京東

自由畫「北國の春」

新潟師範附屬小學等三 高橋勳藏



東中市双葉 梅田 龍子
小學校等三
私たちがべんきやうに
行つて來てから空見ると
夕焼はもうどつつかへ
いつちやつて

後に残るは一番星よ
評「あとに残るは一番星よ」もいゝ。一
番星は云ひました、「オ、ヤ、ス、ミ、ナ、サ、
イ、タ、ツ、コ、サ、ン、キヲノ」(「牧水」)

櫻

京都上京區 近江谷三枝
岡崎神社向
大極殿の、しだれ櫻に
くもの巢が出来た
くもの巢が出来た
露にひかつてきら／＼

インキ

滋賀縣伊香郡 木俣 修二
古保利校高二
インキのせんをぬくと
さいやうな
インキの匂ひがします

火

東京市外幡代 久保田公平
小學校等二
朝晩びびびと
自てん車をならしていそぐ
郵便局のはいだつ人

郵便／＼何何さん
いふがはやいか走る
郵便局のはいだつ人

雪の夜

山梨縣小淵 進藤 花子
澤小校等五
つもつた つもつた大雪に
ざくり ざくりと人の足音

こび

兵庫縣美濃郡 岡本 義光
長尾小學校四
とびとび
うものひよこ
とつたら
いかんぞ

バウシ

京都市龍池池 廣田浩三(八才)
當小學校一年
ツネチャンノバウシヲ
カブルトブカブカデ
ギユツトカブルト

もえる／＼
よくもえる
まつかな火が
よくもえる

まり

山口縣柳井 杉原 修治
小學校等二
ほくがなけると
かぜをきつて
むかうのまつにあたる

みか月

兵庫縣美濃郡 萩原 信夫
別所村正法寺
みか月さんてば
いゝ母さん
お星をどつさり
産んだのね

みか月さんてば
いゝ母さん
私はどうして
生れたの

郵便局のはいだつ人

京都市三條島丸東 佐野 十ヨ

目ガカクレ

愛知縣西尾町 幸村 文子
須田校等一
キシヤ

はし

東京市本郷區 岡崎 英一
臺町九味三
そらをあをけばきらきらと
七つそろつてひかつてる
あれはわたしのすきなほし
一つこまでおちてきな

歸る雁

茨城縣阿波 松田 實
小學校等六
あれ／＼雁が歸りゆく
南の風に送られて
四十から

長野縣豊岡 中川 捨松
小學校等五
ツツと鳴いて居る

自由畫「春の庭」

下關市觀音崎町 古殿松市



四十がらが鳴いて居る
向のところが

お森のからす
長野縣豊岡
小學校尋五 曾根原和市

宮の森から
出たからす
青いお空を
飛でゆく

ちやうちん

東京麹町飯田
町三ノ廿五 岡崎 トク

庭のチャウチン
明るくついた
まどのチャウチン
しづかにゆれた

川の水

神田區小川町
賀古病院内 井關垣(十才)

ながれろく
かはの水
春の光を
あびながら



「私」畫 由 自
子よき石明 町子鏡縣葉千

ヒヨコ 七二

水戸市尋常高
等小學校尋四 前田孝四郎

私のひよこは

かはいゝな

お庭のすみの

日あたりで

親のはねから

顔出して

私をきよろく

ながめてる

お舟

長野縣長藤
小學校尋五 大石 唯男

あれくお舟が川ばたの

あしをゆらく動かして

私の方へよつて来る

きれいなく水中へ

影をゆらくうつらして

私の方へよつて来る

かぜ

神奈川村岡校 志村ミエ子

かぜがとをあけると

たたいてる

かあさんだまつてはりしごと

かぜはおこつて
とをたく

いてふのは

大阪桃園小
學校尋二女 長尾 園子

あれあれむかうへ
きのはがもつた
ひろつて見たらば
いてふの木のは
一まいひろつて

しやしせいした

ばら

千葉縣東金
小學校尋四 村杉 とよ

ばらさんく

さびしから

あなたのあかい

おほかげ

たつた一つで
さびしから

鮎

東京芝區神明
小學校尋五 若月俊一(十二)

春の小川に

鮎が三匹

ちよろくちよろと

銀のうろこをひらめかし

どつかへかあくれた

おさやく

東京小梅小
學校尋四 村上 貞子

母ちゃんのるすに

きやくがきた

母ちゃんいないと

いつたらばおせんべおいて

かへつてつた

丸 蜂

千葉縣東葛飾郡
木間々瀬小學校 後藤 常男

丸蜜飛んだ

小さなアブを追つて来た

小さな石を

投げたら

後を追つて降りて来た

七三



「火のチバミストコバ」畫由自
一 英 崎 岡 五尋校學小之誠市京東



編輯部選
綴方

ベッコ釜さん (一等)

長野縣龍丘 土屋 衛次
小學校尋五

ガリ／＼とやかましいのもかまはず、小さい子供をよびたてます。竹作りの面白い物をふり立てベッコ／＼あめだと言ふ様に面白い物で廣告します。天氣のよい日にはきつと来ますが、四五月から十二月一月といふ頃は来ません。たゞ三四月頃来ます。

ガリ／＼と一ふり廻してガリ／＼と左手に面白い物を、肩にあめの入つた箱をかつき、鳥打帽子をかぶり、がいたうをきて、よいしよ／＼といふ足で歩きます。子供がベッコをと買ひとめますと、ひよいといふ様に箱を下し、がらすのふたをすうと上へあけます。子供はさあといふ氣持をし、手にしつかりと握つた一錢を釜さんに渡し、ベッコあめをもち家

の方へうれしく跳んで行きます。しばらく釜さんは煙草をすつてゐます。すると五六人の女男の子供が釜ア早く／＼とせきたて、錢をやるのも忘れて、これはあついでと、これはうすいつてあついのをもつてどくと、釜がせにだぞといふと、あつさう／＼と一錢をやる、うまさうに長い舌を出してねぶり、次の人が買ふまでまつてをり、次の人が買つてどくと、ほうま(おま)はあついなア、馬鹿、虎ちやんの方があついわと互にいひあつてさもうまい様に赤い舌へのして、ほうまこれこんな物になつたと、をんに俺のも今にないといひあつて、さたう一斤くれと菓子屋へ行つていひます。かふとまた肩にかつき、よいしよ／＼と寒がりさうに煙草をすつて家の方へ急いで行きます。雨ふりの様な日に、折々買物に出て来ます。小さい子供等がきものすそに取りつかまり釜アはいづくるのなすがりつきまます。釜はほんとに子供がなれつきまます。ベッコ釜を見るとやいベッコ釜が行くわと小さい子供等がさわきます。

おはちきをやり始めました。だん／＼負けて来ると、つうちやんはづるい眞似をして、だめなのをだめぢやないなどと云つてづらかし(おど)しました。

私はかまはないでやつて居ると、おはちきがみんな負けてしまひました。そろ／＼まさちやんとつうちやんが「くろくろ」と始まりました。「やだおら、くろつて言はね約束でやつたのよ、くろ／＼して始まつた」と言ふとつらちやんはさう言ふ事はかまはず「とくちやん、くろよ」といぢめ始めました。「よう、くろつちの、よかつべな、あんなにあんだものなや、つうちやん」とまさちやんがつうちやんに言ふと、つうちやんも「あんなにあんだものよかつべなや、くろつちのとくちやん」と云つて居て家へ歸らうともせず、とうれんで(うれ)ぐねで(ぐね)居ました。

私は仕方ないので八十位出しました。二人は「おうよかつた／＼」とおはちきをかかへてにこ／＼笑つて居ます。私が算術をやらうと思つて来てしまふ

と、まだつうちやんが「今つとくろつちの(おど)」と私のおはちきを勘定して居る所へ来て、又ねだり始めました。ようたくちやん、後五十でいいからくろつちの」と言つて居てそこに立つて居ました。あつべな、ほら(おど)とおはちきをさして云ふと「これはかりすく負けつちやあべいな」と云つて、つうちやんはどうしてももつともらふ氣か、そこを動きません。

私が「負けたら、こうよ(来)」と云ふと、まさちやんが「よかつべな、あんなにあんだもの」と云つて、うらやましさに見て居ます。「明日(あ)こうよ(来)明日(あ)だすか(おど)」と私が云ふと、又二人で「あしたぢやだいたよ(おど)。くろつちのに、とくちやん」と又いぢめて居ます。

だすのにはほしいし、いぢめられるしで、私はどうしてよいかわからないのでたゞ雀のさわいで居るのを見て居ました。そこへお母さんが来て「明日(あ)出すつちか(おど)起きたらすく(来)」と云ふと二人は何と思つたか、とつととかけて行

自由畫「私の帽子」

山形縣琢成小學校高二 齋藤與助

私帽子



いぢめる女 (二等)

茨城縣眞壁郡 栗野 とく
若柳校尋六

負けてもくろ(おど)と言はない約束で

きました。

いぢめる人が行つてしまつたせいか、心持がせいせとしました。



自由畫「かさ」

東京市深川區木場町 旗手トキ子

芳一のまんねんひつ(三等)

長野縣永明 小學校五年 名取 重榮

六日の日、朝學校へいくと、芳一がかなしうなかなほをして居ました。ほくがなにをしたといつたら、まんねんひつをなくしたといつてまごまごして居ました。せきをあげたり、かばんをさなけたりせきのしたを見たりして、いくどせきやかばんをあげたかわからない。ほくはどこにあるかとおもつて、きよろきよろして見てやつた。すると、小平先生がとをがらがらとおとをたててはいつてきた。みんなはおどろいてせきについた。まもなくれいをしたので、みんないつしよにれいをした。雨はほちほちとちひさな雨がふつてゐる。そらのほうはくもだらけです。せきの中はともくらくて、よつくとばん(だん)のじがわからなかつた。先生はいろいろおもしろいお話しをしてゐる。ほくが芳一のうしろへふりむいてみると、まだいやな青いかほをしながら先生のはなしをきいてゐた。そのうちに、

でる太鼓がどんどんとなりだした。先生はそれでもはなしをつづけてゐる。どしどしがたんがたんとおとをたててにかいを下る外の級のおとがきこえてくる。先生は話をやめた。

ほくはれいをして芳一のほうへむくと又いやなかなほをしてせきをでた。にはへでるといいかぜがほくのほうをふいた。體操場へいくといせをだちのところでは、大きなこえをしてけんをやつてゐる。ほくはれいをしてきたところへかてになつてけんをした。芳一もいやなかなほをしながらおにつこをやつた。とんらあがおにだつた。芳一はいつでもいやなかなほをしてゐた。

そのあしたまびにいくと、こたつにあつてにこ／＼して本だけ見てゐた。ほくが芳一にまんねんひつあつたかときいたら、「お、たんすの中にあつた」といつた。その日は學校へいつてもにこにこしてゐた。

エルマンを聞く前

東京市東區 小學校五年 岡島眞理子

寒いなあ太陽が雲から出てくれればいいにアと思ひながら、手を耳にしたまま少し行つた。すると小川のほとりに出た川にはつめたいやうな水がチヨロ／＼と流れてよけいに寒いやうに思はれた。岸から下つた一寸ちのかれ草のまがつたのの一つのつら／＼がついてゐる。足をおもて見ながら通つた。かれ草の先は水についてたえずはれたやうなゆれ方をしてゐる。私はきつとつら／＼はまつとうごきたいのに、まつと勇ましくふれたいの寒いのためにあれしかゆれることができないうだらう。なまけないと深く感じた。つら／＼はちよつと遠くから見ると小さい球電のやうに見える。ある朝友達と電氣だとしてかれ草と一所にとつて見せあひしたやうなことも思ひ出した。今はどれもこれも圓い満ぞくらしい顔をしてゐるが、今に我等のかへりになると消えてしまはなければならぬと思へばまたさびしい。

寒い朝

長野縣伊賀良 小學校高二年 椎名 國夫

今朝は日に雲がかゝつてゐるから寒いからころ／＼と雪の間のせまい路を半町もすぎた。いつもの氷にのる所まで来た。いつもの勇ましい氷すべりが目に見えるやうであつた。田の土手でふりかへつて友のくるのを見たがまだこなかつた。今朝のやうないゝ氷の時に用事がないといふと思つた。あんまりいゝので乗らずにおいたらもつたないといふと、一人言をいひながら田に入つて「コッソ／＼とスーと行きかへりすべつたが、おもしろくてよす氣になれない。今一度今一度と三四回すべりまつとのりたが、用があるからしかたなく、口おしくてたまらなかつたが出

濱邊で

「へびが居る……」といつて一人の友達がやめき出しました。そこは村の下の橋の所でした。川のそばにつんだ石がけの所々青々とした一かたまりの草がありました。友達にはぎりこぶしをして其の方向に手をさしました。ほかの者はどこに／＼といひながら手の先の方を見ました。私はあとできやうといひで見てゆかずに道に居ました。どど……と走つて来た友達達は「あそこ、居る」といひながら橋の上にあがりました。そのやうすはまるで常とちがつて居ました。手をがた／＼ふるはせながら足のあたりに、居りはしま

へび

若狭國大飯郡高 小學校高二年 一ノ瀬 キク

波がばちやんばちやんと音をたて、居る。海の水は次第次第に多くなつて来る。小舟は岸へ岸へちかづく。あゝ小島から黒い煙をはき青い波をかき分けて汽船がはしつて出た。山がかすんできれいだ日が出てつて其の上風がそよそよと吹いて大そうよい心持である。

くと前に云つたので夕方着物をきかへて帝劇へ行きますと、まだ大そう時間があるからよい所へ伸れてつてあけませうといつて、どん／＼歩いてゆきました。俣が七八臺つてゐる裏玄關らしいす暗い所で、長二さんは玄關番に、榮三郎さんはもう来て居ますかといひながらどんだん私を伴れて梯子段を上つてゆきました。そこは大そう明るくて二つのすがた見があつて、其の前にまゆけをすつた男の人が後のお客と京都のお話をしながら額から、後へかけて一寸巾位のばんそうこうのやうな物をまきつけて、其の上には白粉を度度も／＼塗つて居ると、張りつけた筋が分らなくなりました。三十五位のはいからに結つた美しい小母さんが私にお菓子を出して、天どんを食へ出しました。泰次郎と云ふ子が大きい人に赤色で顔をゑどつてもらひながら私の方を見て顔をのぼしたりち／＼めたりして、笑はせて居ました。そこを出て、きたない所を通りぬけると、廣場に見物がぎつしり、うよ／＼して居ました。よく見ると藝妓や半玉のやうな人ばかりでした。暮

廣島高師附 小學校二年 金子 哲郎

いかとはらふやうにして居られました。「どんなやつだ」と私がすぐ問ふと、「あのね、やがすりのやうなちやうでないア……きいろいやうな色しとつたで……内らアどなへきやうとかつたおもてへなア」とふるふやうにいつて居られました。私はびつくりしました。それは小さい小へびだと思つて居たのに大そう大きかつたからでした。私は上のはしにまいてあつた小石をひらつては草の上からひどくぶつつけました。へびはびつくりしてうごき出しました。それに皆もびつくりされてはけ出しました。中には小さい子なのであとからなきながら走つてきました。五六間はなれた所まで来てみん

なそこにとまりました。「お……きやうとかつたなア、きいろい色したのは今見はじめや」といつてむねをなで下して居たものもありました。もう小さい子供もなきやみました。もう一度いつて見ようといふので又そろそろあるいて見に行き出しました。そばへいつてよく見るとへびはもうにけていつて居りませんでした。皆はほつと安心した

うち神様の森の中を道が通つてゐました。芽を吹いたばかりの木が杉の木の一ぱい生えてゐて、下はやはらかい苔です。緑の木の間に赤い鳥居やお宮がちらら見えしました。櫻が両側に植ゑてあつて、其の枝が両方からのびて、花のとんねるが出来てゐます。そのとんねるをくぐつて高い石段が見えて、鶏がほろ／＼散る花をあげて遊んで居るお寺もありました。花とんねるの上には高い杉の木が立つてゐて、その傍に鐘つき堂もありました。お経の聲が静かに聞えて來ます。村のまはりには麥畑です。緑の麥が五寸ばかりのびて、あぜには菜の花が眞盛りです。鉢巻きした爺さんがのんきさうにくはを動かしてゐます。爺さんのお供らしい茶色の犬が、あつちへ行つたりこつちへ行つたり蝶を追ひかけまはつてゐます。所々には桃の花が赤く見えます。もう太鼓がよく聞えて來ます。こんび

ら様は富士山のかくこうした山の頂上にあるのです。暗着を着た人達が曲りくねつた小道を蟻の行列の様に登つて行きま

やうなかほつきをして居りました。さうして皆はしまひにはきやうといふこともすつかりわすれて心の中がすいとしました。そのへびを私は見ませんでした。友達のいはれるには、それを見た時はかみのねがしまるやうであつたといつて居られました。

病の起り

朝鮮大邱公立第一小學校尋常科 向 阪 昂

六日の夜であつた。七時頃大便に行つた。そして自分でも腹が悪いなと思つた。床についてから一時間位すると、眼がさめて又大便に行つた。そして下痢をした。出て手を洗つた。その時母が「この頃はチブスのはやるから柿などを喰べてはいけないよ。」といつてゐられたことを思ひ出しました。僕は晝、麻野の坊ちゃんから、柿をもらつたからたべようとしたが、一口かんで直ぐ吐き出して了つた。だからチブスになるはずはないと思つたが、神経家だから氣になつて仕様がなない。「チブスチブス。」と、口の中で言ひながら、ブルブルふるへて茶の間で來た。茶の間で

は女中が今寝ようとしてゐる所だ、おおくにさん、お父さんの胃の薬をくれ。」といつて、湯呑に湯を入れて、ふるへながら立つてゐた。女中はびつくりして薬を持つて來た。あまり體がふるへるので、女中は母に知らせたらしい。母は起きて來て僕のふるへるのを見て驚かれたらしい。僕も漸く床に入つた。けれども中々ねつかれない。チブス。チブス。チブスになつて死にでもしたらと、そんなことばかり考へてゐた。母が來て熱をはかると、三十九度あつた。これが僕の病氣の起りであつた。

藤堂まで

山梨縣上九一 土橋 郁子 色小學校尋常科

昨日は藤堂のこんびら様へ参りました。大きいボブラの立ち竝んだ學校の裏をぬけるともう山です。やはらかい草が青々と芽を吹いて、其の間には赤い山つゝじが太い松の根本などに咲いてゐます。その上を小鳥がピョコン／＼とびまはつてゐます。その小山をこえると中村と云ふ村でした。

私達もその行列にはいりました。愈な坂で中々苦しく汗がボタ／＼おちました。雑木を切りはらつて店が一ぱいはつてありました。ほうづきを鳴らす音や二錢の笛の聲が喧しく聞えます。

やうやく頂上に着くと、若い衆が勢よく太鼓を叩いてゐました。

或日曜日

兵庫縣田嶋野 奥村 よしゑ 小學校尋常科

今日は日曜で朝から好いお天気です。ねえやが野良に行くので、私もついて行きました。

家を出て前の廣い野原を通つて船にのりました。ねえやが竿をさして川を渡つて向う岸につくと、そこで少らく休んで又畑まで歩いて行きました。そこでねえやが麥畑をうち初めました。空では雲雀がピョピョとないて居ます。私は持つて來たござをしいてねえやが土をうつのをちつと見て居ました。ざくりざくりと音がしてまだ新しい赤黒い土が出て來ます。如何にも面白さうで私もして見たいやうな氣がしました。するとその時一匹の

へるが足の先を少しねえやのくはで切られて出て來ました。そしてちつと死んだ様になつて動きません。大分すると、そろそろと歩き出したのでやつと安心しました。その畑がすんで次の畑に行きました。そこにはたくさんほうしやよもぎやせりが生えて居ましたので、ふうちやんや幹ちやんもつれてくればよかつたと思ひました。そこでまへだれに一ぱいほうしやよもぎをつみました。そこへ上りの汽車が向うを通りました。するとねえやが休みませうと云ひましたので、草の上にしをを下しました。するとねえやが大根をこいで來てくはで皮をむいて呉れました。大そう、おいしゅう御座いました。やがてねえやも又仕事をし出したので、私もよもぎをつみはじめました。それから二時間程たつと養源寺の鐘が如何にも腹のへつた様な音でなりましたので、ねえやと草の上で楽しくお辨當をたべました。やがてねえやも又仕事に取り掛りました。

お菓子

妹をつれてお使へ行つたかへり道、妹が急にたちどまつた。なんだと思つて見たら、お菓子屋の店の前であつた。そして指をしやぶりながら店の前にたつてゐた。私はきまりが悪くなつたのでむりに家へつれて行こうとしたら、妹は大きな聲で泣きたてた。私は顔を赤くして、つれて行こうとしても、なほはけしくなくのであつた。そこへお菓子屋の人が来てお菓子をくれた。私はきまりが、悪くて顔を赤くして家へかへつた。

お父さん

大阪府天王寺師範 三谷 ミツ
附屬小學校尋四

お父さん、私は、お父さんが、ゐないとは思はれません。きつと、長いゆめを見てゐらつしやるやうに、思へてなりません。また、お父さんは、長いたびをしてゐらつしやるやうに思へます。

お父さん、私は、あきらめられませんが、お父さんの様な、ぢやうぶな人をだれが、天へつれていつてしまつたので

せうね。お父さん、私には「お父さん」と、よぶ人がありませんでも、ほかの人には、お父さんが、ありませう。道を、通つてゐても、お父さんと、いつしよどこかへ、行く人を見ると、お父さんといつしよに、よそへいつたことを、思ひ出します。お父さんと、てんが茶屋の、しまひの先生の所へ、よく晩に行きましたわ、お父さんの力の入つた聲、手つきそれから足を、ときんぐきれいに、はりつめた、板の上へ、「どん」と、しなると、よく、その音が、ひびいて、ほんとに、私は、おもひうございしました。うちへかへつたら、お父さんは、「みつ子ねむたさうな顔して見てた」と、お父さんはおつしやつたこともございしました。

死んだ竹ちやん

長野縣下伊 井深 す賀
那郡松尾村

おへやの障子をそつとあけて中へ入つ

て行きました。眞赤な目をした竹ちやんのお母さんが、白いきれを顔にかけてある竹ちやんのそばに坐つて居りました。私と姉さんが行くと、布をそつとつて竹ちやんの顔を見せてくれました。眞白な顔をして目をつむつて居る竹ちやんは眠つてゐるやうでした。一寸どこかにさはつて竹ちやん竹ちやんと呼べば、すぐに目を開いて笑ふやうで私はどうしても竹ちやんが死んだとは思へません。けれども竹ちやんは冷たかくたくなつて、ちやうど白い蠟でこしらへた人形の様でありました。涙がほろ／＼出ました。どうしても長く竹ちやんの顔を見てゐることができません。またもとの様に布をかけておきました。枕元のお線香立てにお線香を立てました。おへやの中に居る人達はみんな眞赤な目をしてゐました。

うだのをぢさんに送る手紙

奈良縣磯城郡城 東野 芳榮
鳥取常小學校

をちさん、をばさんも、おあばさんもお

マドラシマシタ。

起業祭の日に

八橋市天神 松本 秀雄
小學校尋二

「青山のへいたいさん何にくう、あんこくうどうしてくうどうかかうかくう」もうおにかいにも一人で上ります。せんと（外のおふろ）につれていくと、よその赤ちやんの手をはさつて、「ふとてゐらつしやるね」と言ひます。

たつしやですか。私の方では昨日ふつた雪が今日まだとけてゐませんから、あなたの方はさぞつもつたでせう。その雪におばあさんはおきけになりませんでしやがうちのおばあさんはほうやおのおもりでおこたへあつてもらふひまのないのです。私はさしでもたすけようとおもつて、おんぶするといふのですけれど、皆ながあぶなといつておんぶさせてくださいません。うちのあかちやんは大へん大きくなつて、今日ではもう八十日程もたちます。やぶんなんども皆にほうやがあいきやうをふりまいてよくわらひます今日ぐんちやうさんがいらつしやつて、私は一等でこほうびをちやうだいしました。えらいでせう。又あかちやんをみにかへつてこほうびちやうだいね。

妹ご人形

東京カテイ 日向 桃子
小學校尋四

「チョウちやんいくつ」「四つ」大きい姉ちやんは「十三七つ」「だれとおんなじ」「のゝさんとおんなじ」そんならへいたいちやんのうたをうたつてちやうだい

ユ キ

東京市相生 津田英男(九七)
小學校尋一

ケサ、ボクガネテキルウチカラ、コナユキダフリダシマシタ。カアサマニ、マドラアケテイタダイテ、ネドコノ中カラナガメマシタ。オムカウノオクラノヤネモ、ヒノミダイダノモ、ダンダントシロクナリマス。アマリナガクアケテキルトイケナイトオモツテクシヤミヲシナガラ

去年の製鐵所の起業祭の日に、僕は八幡停車場の所を通つてゐた。すると電信柱の横に親子二人の乞食がゐた。親の方はかたわで、二つ手の五本の指が虎の足の様になつてゐる。又足は片足がなくなつてゐて、子供と云つてもまだ五六歳、僕はかはいさうに思つてしばらく見てゐた。

通りの人は誰一人として、このかはいさうな親子にお金を一銭なりともめぐんでやらない。

そこりつばななりをした、紳士が一人通りかゝつた。紳士は乞食を見てポケットに手をつこゝんでゐるたががま口を出した。そして二銭を乞食に投げてやらうとしたが、手をひつこめてそのまゝ通り過した。僕はその紳士に、けんこつをやつて見たいと思つた。僕は父からもつた、小づかひ錢の二銭を乞食にやつた。



通信

當選自由畫

山本 鼎

△人の描いた畫を其のまゝ寫したやうなものや、いたづら描きのやうなものが少くなつて来たのは何よりです。

△竹下節子さんの花籠の寫生は、目に見た實體を落着いて寫生してあるので大いへん良い感じですが、何物をも此のやうに沈着に眺めさせてお描きなさい。

△川崎泰義君は家と樹木との景色をすいぶんすきです。君の鉛筆畫は物の形がぼつくりと描けて居て、鉛筆の濃淡が適當に遠近を示して居て、此畫は下の石垣がまじり。まるで織網のやうじやありませんか。左の扉が一番充分に描けて居ます。

△木浦亮君の筆立ての寫生はなかなかかすつかりして居る。此調子で充分におきなさい。△齋藤興助君の帽子の寫生もたしかに描けては居るが、かげ、日なたがたゞ二々調子で現してあるので深みがありません。日なたの部分にもかげの部分にも實際のものにはもつと變化がある筈です。△榎本トキ子さんの傘の寫生はすなほにかけ居て、△岡崎英一君の「火バチトスミバコ」は勢ひのある氣持のいい畫です。△高橋勲君の「北國の春」は込入つた處をうまく描いてある。手前の屋根がもつと強い線(ペンキ)の屋根位(の)で描けてあると一層いいのですが。△古殿松市君の「春の庭」は、なか／＼良いい畫です。たゞ土壁の面へ斜に引かれた數十本の線は他の線と不調和です。それから互の屋根に對して下の物件が軽すぎるやうで、かげ日なたの表現があつさりすぎて居るので、△明石さよ子さんの畫はどれも大まかですが、むだが多いから畫がうるさく見えます。例へば此あなたの自畫像にしても、眉と眉との間の鼻の莖のやうな線や、眼と鼻の間の窪みを見えさうとした太い線や、鼻の下の溝を示

童話の選後に

野口雨情

今回、あつまりました童話は二千三百六十二篇ありました。私は五日間かかつてのこらず読んでみました。

東京が六百二十四篇、大阪と神戸とて八百〇二篇、宮城縣が百十篇、長野縣が百〇二篇そのほかは、三十篇四十篇位づゝ各府縣に分れてをります。樺太からは七篇、滿洲からは十二篇、臺灣からは十五篇、朝鮮からは四十一篇、北海道からは五十六篇ありました。いつもの時にくらべて朝鮮と北海道とが割合にすくなかつたのです。そして、誌上に載つたのは一二等當選以下五十篇足らずです。この二千三百幾篇かは、其内公表して、皆さん方のたふとい努力に酬ひたい考へから、私の手もとにしまつて置くことにしました。そ

れから、又同じ位のもの作は先に肩いた方をとりました。掲載外で、とりわけ私の目を惹いたのは、小雀(黒須利夫) 夢殿(小澤亨) 螢(高津英) 私の花壇(茅野晴子) 廣い野原(狩野鐘太郎) 頬白(西村まよ子) 土筆(神谷桃子) 赤とんぼ(鈴木友花) の八篇でした。竹内孝一、廣田守一、佐藤勝彦、芳香信愛さん達のはいゝ作でしたが、金の船童話會のと一緒になつてはいけなから避にはいれませんでした。(五月七日)

先生や兄さん 姉さんたちへ

若山牧水

幼い時を作る人たちの先生その他へ——幼年詩といふとむづかしく聞えるが私はこれに「子どものうた」と読んでゐます。つまり子供がめい／＼に調子をつけてうたふ歌の謂です。その子供のうたの中で私の一番好ましく思ふのは子供たちがいきなり何かに向つて云ひかける言葉、あれです。あの中にはほんとうに自然な、正直な、いき／＼した子供のこゝろが含まれてゐます。單純過ぎる場合が多いが然し子供の歌の根本は其處にあると思ふ。今

▼童話選外佳作 先生の話(高井宮) 哀れな鴉の話(伊藤温子) 善い爺さんと悪い虎(加納治夫) 秋の夜の寺(深見冬都) 密柑畑の神様(荒井直) 節屋(佐藤勝彦) 浅葱屋(坂田露香) 虹の賞(齋藤素果) 無精者(大西淳三) バベルの塔(今福一雄) 王様の病、その他(千葉新一郎) 一郎と雁(中島敏) 五色の種(關警信) こぼるぎ(後藤金治郎) 桃の花散る頃(高橋久) 四人の響(吉田紫山) 狐と小僧(明法寺藤太) 猿の行水(堀江不曲) 大蛇寺の小坊主其他(寺島西男) 狸の腹鼓(小泉南潮) 黄金の國(山賀武夫) 浮草と魚(中西京之助) 阿呆鳥(越山季一) 三の後悔(千日京之助) オブラ小人(石井謙三) 孝行の償(齋藤直文) 心配新平(赤城角郎) 忍子の辛稻(浦田乃六) 山猿の思返(松本辰雄) 花園の花と路傍の花(松平豊) 徳八爺さん(都築益世) 白蛇の怨(車橋修三) あらそひ(佐東水帆) 義經と愛犬(古川芳露) ひよる助とおかば(藤深孝綱) お米と火の話(高橋治賢) 三つの問答(露本白揚) 奥山の呪(八木笠雲) 男と子狸(三木貞男) 二人盗人(河崎誠) お土産(柳澤ひろし) 白蛇と男(新居雄登) 落花の鐘(弘田三郎) きかんぼの鬼(山本秀治) 小人と女王(増山新生) お嫁さん(後藤金治郎) 夢の蜜蜂(黒川義明) 蚕と繭(新谷芳春) 赤薬と白薬(浦田白羊) 博の旅行(野崎都二) 小人と女王其他(須賀鬼将) 夢(茂波吾郎) 無理な望み(宮本茂) 森其他(波田篤憲) 山吹の精(川崎慶二郎) 蛙とお姫様(今野嘉雄) 寶島の船(佐藤一三) ひとりで鳴る鐘(西

村青牛) 仲の悪い兄弟の話(岡田信光) お竜さんは(牧野傳) 月の鏡(長田勝郎) 小さい蟻(原口潤花) ある爺さんの話(島津けむ) 化け和尚と魚屋(藤井秀雄) 人を化した人(依田峰春) 二荒山の鳥(塚原嘉郎) 銀の鍵(村田アイ子) 鳥の思返(林しげる) 人形の日記其他(作間博) 猿と鬼(屋田露草) 笹舟青木伯録(文藝會を見に(和歌子)) 二人の獵師(吉田紫山) 山の男と妹(齋藤秀逸) 黄金國(永見克也) 狐の巢(粟月須美子) 仙人家(波光) お婆さんと虹(五島龍生) 赤い船(神山習々) 一本の白い羽(木谷末次郎) グリパアの飾(酒井紅洋) 悪魔の正體(歌田涙芳) 無題(中村直人) 夢の笛(深谷さち) 一休頼智(鈴木一誠) 大菩薩王(茂木泰三) 二皇子と櫻姫(津田綾子) 不思議な紳士(佐々木高明) 無題(須野清) つばめ(藤原美知子) 三色草(藤井亮) 忠雄さんと勇さん(長芝園蔵) 無題(柴田優子) 天國(梅田三良) 花子の夢(梅田龍子) 或る日曜日(庄野誠一) 櫻の自慢(久保田公平) 雀と鬼(井關正) 魔の羊小澤尊文 木樵と妹(山本康市) 似せ佛(土橋力) トカゲと人魚(竹谷猛虎) 三匹のしくじり(井深しん枝) 藤太(畑野法作) 獅子の王様(佐藤秋水) 窓ばり(今井松夫) 金星に住む魔の學者(山本正) 王様になつた少年(松平正樹) 燈臺の光(古藤雅文) 春風の丘(高橋元一郎) 鶴權兵衛(神戶正一) 河つた賜物(水島正雄) 不思議な五人男(五つ木太郎) かっこう鳥(新谷芳春) 罫魔の夢(鈴木千鳥) 命の標草入(松田里二) (以下次號)

月號のて例をとると城田さんの「とけい池田君の春」、久保田君の「火」、杉原君の「まり」、岡本君の「とび」、長尾君の「ネコ」などが先づその部類です。此處から出して自然に観照的にもなり、思索的にもなつてゆくといふものでせう。さうでなくて最初からいやに大人じみた、もの真似式の、氣取つたものは單に子供の歌と云はず、詩とし藝術として死んでゐるものです。

で、多少の暗示や解きほぐしをばしあげて下さいが、それからさきに深入して斯うしろあしるなばどうかせぬ様にして下さい。なか／＼彼等の心の中には昔の生へた我等の生命より遙かに立派なものがある様です。

懸賞童話を読んで

選者

山の様に積まれた童話を選るので中々骨が折れました。しかし、どの作に對しても細い注意をもつて作の美點を見出す事に努めた積りです。大體からいって、從來のお定りの型を行く童話が減つて創作味を帯びたものが殆ど大部分を占めてゐる事は喜しい傾向がうた出来たばかりといつても餘りヒドイ作がなく大抵つづの備つてゐた事も氣持のいい事でした。

さんと悪い虎の話」は可愛しい作でした。それから大西氏「無精者」今福氏「パールの塔」千葉氏の諸作中西氏「浮草と魚」荒井氏「蜜柑畑の神様」高橋氏の諸作後藤氏「こぼろぎの話」關氏「五色の種」石井氏「ゴブア小人」坂田氏「淺葱櫻」佐藤氏「熊皇」千田氏「三人の後侮」越山氏「黒助と赤丸」心配新年「山賀氏」「失はれた月餅」などの作は何れも優秀な作でした。話の面白いものでは、松本氏「山猿の返返し」寺島氏「章魚の返返し」深見氏「秋の寺」堀口氏「猿の行水」明法寺氏「狐と小僧」小泉氏「狸の腹鼓」古川氏「義經と愛犬」吉田氏「四人の聲」中橋氏「白蛇の怨み」などの作が主なものでした。何れこれ等の諸作の中からいゝものを機會を見て誌上に掲載します。(佐次郎生)

綴方を読んで

選者

こんどは三ヶ月もかゝつて選抜したものですからどれも立派な出来です。いつもの月の倍だすことになりましたが、それでもまだ充分のせきれないのでこまりました。

土屋君の「ベッコ益さん」は純朴な言葉で飾らず、飾らず、觀たままを正直に書いてゐます。館屋のお爺さんの姿態がよく書けてゐる

た。日本諸國の口碑や傳説を扱つたもので面白いものが澤山にありました。併し惜しい事には折角のいい材料を殺してゐるものも多かつたのは残念です。等に當選した山田三次郎氏の「三郎次物語」は口碑に倣つてゐる話に多分の想像が加つて出来たものと思ひますが話の材料からいふと珍しい位面白いもので殊に「戀しくば」の歌などは如何にも日本の郷土的臭ひを帯びた傑作です。話の面白いためもありませうが、かき方も筋をいかにすだけに行つてゐるので一等に推薦した次第です。二等の「神杖さんと燕」も中々いい作です。作者の創作力を十分に信じてゐる事が出来た。自由で伸び／＼してゐる點は感服作中第一でした。燕の脚へ紅い絹糸を結びつけたり、燕がアメリカの少女の便りを持つて来るなど美しい想像ではありませぬか。それから最後に排日問題を聞いて少女の眞々とした心が大人達の利己主義にあつて暗い氣持になるあたり巧いものです。

その他の諸作では高井宮氏の「先生の話」が傑出してゐました。堪らないい處がありました。伊藤温子さんの「哀れな鴉の話」は表現の上に多少の不十分があるにもせよ、氣持のいいものでした。加納さんの「善い爺」ではありませぬか。それによつて子供たちの動作もあり／＼と見るやうです。

栗野さんの「いちぢめな女」もすてきです。「私はどうしてよいかわからないのでたゞ雀のさわりでゐるのを見てゐました」は上出来。名取君は、萬年筆をなくした芳一君の心理や表情をくつきり書きました。芳一君のこまつたやうな顔が見えます。

岡島さんの「はながいものでしたから前の半分だけ出しました。後のエルマンを聞く條もよくできてゐました。椎名君のは後半の水すべりをしてから小川に滑うて行くところがことうまい。金子君の「濱邊」は立派な散文です。きもちのいいものです。一瀬さんの「へび」はよくまとまつてゐます。むだのない文章でへびの出た前後の情景をはつきり書いてゐます。向坂君は相變らず達者です。土橋さんの「はながいので後の方をすこしげづりしました。路々の精緻な觀察にはすつかり感心しました。あなたはいゝ眼と耳とをもつてなられます。その眼と耳とをよく育てゝいけば立派なものになります。その他、奥村さん、村井さん、三谷さん、深さん、東野さん、日向さん、津田さん、松本さん、それ／＼上出来です。佳作のうちでも出したのが随分ありました。(ヤマモト)

童話選外佳作月(藤田圭雄) 青い小鳥

(渡邊四郎) 朝(森谷克敏) ゆめがくる(美野咲花) こたま(大原英) 娘白(白好野郎) 星(生白陽子) 何にやけた(鈴木章弘) 電燈(高井宮) たそがれ(川村貞夫) 燕さん(中西銀之助) 彼岸(藤井秀雄) 吊りさげ(岩見清三) 椿の花輪(神山晋々) 時計(藤岡宗義) 夕鏡(小塚きよし) 迷兎雀(中島夢歌) 大石小石(林四佳樓) はたもと(佐々木高明) 夕日の田舎(芝情吉) 白鶴車(後藤葉三) 坂の上(青木伯録) 燕(桃井尙夫) 豆の花(大高寅雄) 虹の橋(三木貞男) 小さな靴家(松尾政一) 夏の雲海(富田勇太郎) 泣き人形(高橋秀三) 蝶と菜花(荒井豆) 小鳥の轉浪(觀世ひで子) 蛙(山本吉見) 鹿島の館屋(黒川義明) 金の杖(岩崎正一) 風船玉(南浩光) 馬車(内藤一) 土蔵の屋根(作間博) 餅つき鬼(田中一夫) つら／＼と棒(所四出男) ぶらんこ(長野昌水譯) 櫻(白川初太郎) なみだ(近藤廣治) 夕立前(川口一雄) 春(中島琴子) 人形(隅田三四子) 啞の鶯(福岡信夫) 粉挽き(和田開清) お猿さん(山田清太郎) 春の野(和田篤憲) 蛙の卵(中山沃二) 夕鏡(中村二郎) 新調(鬼頭信太郎) 丹波の山(橋詰芳藏) 雀のダンス(平山信吉) 眠った港(新井信彌) おどろ蟲(片山敏次) 星(中村眠草) 春の秘密(蒲留瀨) 花辨の船(富永宇吉) 蟹(谷岩市) 馬車馬(久田紅峯) 椿の木(松島五治) 月(松尾政一) けさ(佐藤小徳) 蝦ひげ(和田健作) 風殿(新原良敏) 竹馬(岸本実) 笛吹き童(森田克己) 蟹(船島昌幸) あかん坊

(福岡信夫) つばめ(樂生田省三) 辻の地蔵さん(山村孝一) 春の日暮(高橋十成) 土筆(田原秋雄) タぐれ(南淵太郎) 缺伸(和田武男) 春(齋藤泰次郎) 四季の風(下谷花鈴) 蟻(江口紅詩郎) カラス(鎌田敬三郎) 大嵐(青山榮毛譯) あかり(和田光子) 金魚の行列(大高寅雄) 五月の花(高橋洪子) 闇夜(中條英彦) 寶丹(三浦葆光) 七つの頭飾(井上初子) 首の旅(水谷秋糸) 三つ打鐘(古川芳露) 鍛冶屋(齋藤勇) 青い空(丹羽彦彦) お玉じやくし(比良山彦) 鳥と小犬(高口英司) 花ざかり(佐藤愛子) 雲雀(星野秀三) 椿(磯原ちと) 鶯(角矢伊麻雄) かすみ(大塚かづな) お節句(大塚大助) 雀(船橋夢月) お猿さん(安達清吉) 宿無し犬(安達龍作) 燕の子(今野喜雄) 春雨のおちさん(砂東水帆) 鶯(早瀬松濤) 燕が来た(西川彌次郎) 童謡(石川登) 蛇毒(前田ゆり夫) 藤(平賀恒太郎) 古狐(宮本重雄) 柳のころも(後藤葉三) 雨(永田葉舟) お母さんお乳(岩崎行義) 山鳩野鳩(北村望邑) 金の船(田和千穂) 私の父さん(古川芳子) 雪の夜(山口隆志) お月様(守谷太郎) 桃の花(照井白穂) 猿廻し(小野哲夫) ふくるさん(東郷寛後) 竹の子(廣隆軍一) 青嵐(熊田寛三) ホンホント鼓(高橋保治郎) 狐の提灯(山村貞子) お寺の餅つき(佐藤三三) 夕(田中豊水) 蓮(小尾青鸞) 昔つた道(恒川北平) お星さま(善理一枝) 夢(藤井正夫) 梅(勝本俊子) 星(關澤信) 春(田村盛) 雨降る日(住吉燾火) 小按摩(塚本篤雄) (以下次號)

記者より

▲青葉の五月も過ぎて初夏の氣候になりました。この一と月は「蛙に目をかりられる」とかいふ位で、何かしてゐても睡くなる程いゝ氣持の時ですが、編輯部のわれわれは「讀者文藝號」を片づけるためにそれはいゝ大忙しで、睡くなる處ではありませんでした。しかし漸くこの仕事も片づいてはつきました。▲さて、募集作品の成績を皆さんはどう御覽になりましたか。驚くほどの数の割合には案外いゝものが少なかったと思はれた方もあるでせう。しかし、そうむやみにいゝ物ばかり集るものではありません。先づこれ位の成績だつたら満足しなければなりません。皆さんの御感想をどしどし投書して下さい。▲「金の船」近く第二週年を迎へる事になります。その時は皆さんをアツと言はせるやうな企をする積りで今から切りと考へてありますが、記者は今後は何れの號に於ても今迄よりはもつと内容の豊かさを、面白いものを作るつもりで大に活氣づいてゐます。その爲めには活字の組方を改めたり、頁数を増したりして大に努力いたします。▲さて、皆さんお喜び下さい。金の船は皆さんの御後援によつて、近來いゝ發行部数を増して、目覺しく發展して行きます。今年中には驚くべき發行部数になる事と思ひます。▲傳説の藤澤先生の「滑稽話集」が今度出ました。純日本童話群りで大變面白いのです。

少女創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選
自由畫、幼年詩、綴方、何れも題は何でもかまひません。みなさんの見たこと感じたことを、みなさんの好きなやうに描いたり、作ったりして出して下さい。原稿には必ず學校と學年、または住所と年齢を書いて下さい。よく出来たものは雑誌に出します。なかでもよく出来たものには賞品をさしあげます。特にすぐれてよくできたものには「金の船」賞をさしあげます。

懸賞創作募集

童話……編輯部選
童謡……野口雨情先生選
童話は二十字語二百行以内、童謡は二十行以内。優秀な作品は推薦又は特選として誌上に發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には三圓、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓賞金として呈します。(原稿は「金の船」編輯部へ送つて下さい)

東京市外田端三五番地
金の船編輯所

定價 壹冊 參拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
壹ケ年分十二冊(送料共)參圓六拾錢
但し新年號四月號九月號は特別號で廿五錢です。御注文の節はこの號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五〇五七號

送) 御注文は必ず前金で御拂込み下さい
金) 送金は振替が一等便利で御座います
の) 切手代用は(壹錢切手)一割増しです
注) 第何巻第何號よりと書いてください
(意) 住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第答へ致します

大正十年六月六日印刷納本(毎月一回)
大正十年七月一日發行
編輯 東京市外田端三五番地 藤澤先生
發行 東京市外田端三五番地 藤澤先生
印刷 東京市小石川區大塚町百八番地 吉田印刷所
東京市麴町區飯田町六丁目
發行所 キンノツノ社
電話九段七五號

△沖野岩三郎先生著(母と子文庫)第二篇

森の祈り

最新刊 四六版二六〇頁表紙口繪麗美
定價金壹圓參拾錢送料金八錢

この長篇物語をあまねく百萬の家庭に推薦す
落日の如く傾ける一家の運命を脊負ひて立てる少年時丸、
けなげにも兄を助けて自らを勵ます妹庚、温情盡くること
なき祖父と母、名を秘して兄妹を助くる行衛不明なりし父、
事件は絶えず展開して讀む者に巻を措かしめざる沖野先生
最近の一大傑作!
讀む母人の眼には涙あるべく、少年少女の血は
湧きぬべし

□近刊 第三篇 日の出づるまで 茅野雅子先生著

鈴木善太郎先生著

第一篇

たんぼぼの家

忽再版 定價送料同一
たまらなく心の美しい子
勢子といふ少女が、その
持つて生れた純美の行爲で
幾多の人々を光明へ導くと
いふ長篇物語。

『母と子文庫』(全十二卷)

は、童話よりは些しく高級
な少年少女長篇讀物です。
どんなにいゝ内容であるか
は次々に出て来ます本を御覽
下さい。
毎月一冊宛刊行、御申込に
なれば全十二卷の内容解説
を進呈致します。

東京市麴町區飯田町六丁目
發行所 キンノツノ社
電話九段七五號

若林文二先生著童話叢書

世界一週

表紙極彩色刷カツト數個入頗美本
各冊正價金貳拾錢(送料貳錢)

◎ 新しきこの童話叢書を見よ ◎

◎ 社會奉仕のために發行せる ◎

第壹編 新しき國 (六月中旬發行)

歐洲大戰が生んだ新しい十五の國とその國々に就いてのお話を面白く書いた、未だ學校の本にも出てゐない學習の參考となるお話が澤山あります。尚、附録としてデンマークの有名な童話「謎の鍵」があります。

第貳編 白天城黃地城 (六月中旬發行)

鷺と梅と杜鵑と早月花との美しい物語を人生に響へて、少年少女諸君にも容易く解るやうに書いた面白いお話で、これまでの童話に一新生面を拓いたものです。

電話小話石川三八九
振替東京三六〇八

正義社

東京本郷駒込
(富士社協)

白面い科學の話

廿三版

林檎の落つる音

子供には時代に伴ふて適當の讀み物を選んでやる必要があるが今日の時勢に適した本としては科學の話を書いた本が第一に位する。近頃世間で科學思想の普及といふことが八釜しく云はれてゐるのは彼の獨逸との大戰が兵の戦ひにあらずして寧ろ科學の戦ひであつたことが立證されたからで、實際科學の進歩せぬ國家は發達もせず強くもならぬのである。本書には六十餘篇の科學の話が満載してある。科學と云へば一概に難かしいものゝやうに考へるが本書の如く面白おかしく書きこなしてあればお伽以上の興味がある。六十餘篇のお話は何れも取りぐに面白く充分に子供の智識慾を満足せしめ得る。子供の頭腦をどうして發達させたらよいか。子供をどうして良い方へ導いたらよいかと苦心される父兄達に是非此書をお薦めする。

露國クルイロフ物語

富士辰馬譯
價八十錢稅六錢

露國の連山人と云はるゝ大家の作四十餘篇何れも珍しいお話ばかりです。

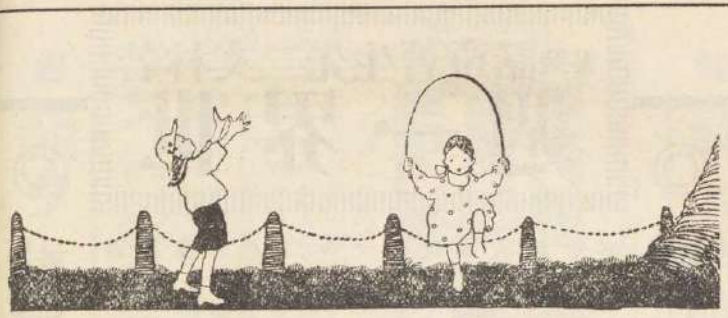
■ 最も新時代に適應した小供の本 ■

理學博士 一戸直藏序 ■ 農學士 渡邊白鷹著 ■ 價一圓二十錢 郵送料八錢

四極 六美 版本

文部省認定

東京神樂町 越山堂 振替電話 九二一 九二一 九二一 九二一 九二一 九二一



金の船 第七巻 附録

「みいちやん、もう三日月様が出てゐます。」
 「三日月様の中には兎がゐませんね。」
 「もうお家へ歸りませう、日が暮れるから。」
 「お家へ歸つて繪雑誌を見て遊びませう。」
 「えい、七月號の繪雑誌を見ませうね。」
 「僕のは「日本の子供」みいちやんのは「ナカヨシ」ね。」
 「ナカヨシの「猫のたなばた」をかしいのよ。」
 「僕は動物園の處が大好きだ。」
 「お嬢様のたなばたの處は、そりや、きれいよ。」
 「青い鳥のつとぎが面白いわ。」
 「あとで、とりかへて見せてね。」
 「うん、さうしようね。」
 「東京の兄さん、あたしほんとに大好き。」
 「毎月「日本の子供」と「ナカヨシ」を送つて下さるからねえ。」

の 後 山 六 爺 さん

沖野岩三郎

三

第二幕は深い山の中の景色でした。餘り暑いので百姓達はみんな樹蔭の涼しい山の中へ逃げて来て、
 「暑いね、こんなに暑くては、仕事も何も出来やしない。」と云つてみんなごろ／＼と寝転んでゐるの
 です。
 山の頂きからそれを御覽になつた女神は、一人の雷を呼んで来て、
 「あの百姓達の眼を覺してやれ！」とお言付けになりました。すると雷は早速何百の大鼓を用意して
 出掛けました。
 「百姓達が寝轉んでゐる所へ、俄かに何百の大鼓の音が聞えたので、みんな吃驚して撥ね起きながら、
 「雷だ雷だ！ お勝を取れないやうに……」と云つて、右に左に逃げ惑ひました。
 舞臺の上は、それはそれは大混雑で、足を踏まれて泣くものやら、突飛されて嘔吐するものやら、芝
 居とは思へない程の騒ぎでした。其所でさあさあと夕立が降つて来て、第二幕は終わりました。次いで、

佐保姫の 錦の衣縫ふ

秋は来ぬ 秋は来ぬ……

といふ合唱があつて、第三幕は開かれました。

「涼しいネ、本當にいい氣持だ。さア一所懸命に働かう。」

百姓達は斯う云つて畑を耕してゐました。所が鎌の柄を頸に掛けて立つてゐた一人の若い男が、

「あれを御覽、いつの間にか、山の風の葉が、あんなに紅くなつたぢやないか。」と云ひました。

「ねえ綺麗だなア、行つて一枝折つて来ようぢやないか。」

「行つて来よう。」

たうとう二人は、鎌を畑の中に投げて置いて、山の方へ紅葉を観に行きました。

廻り舞臺が、くるくると廻りました。其所には美しく紅葉した背景があつて眞紅な紅葉の枝の下

で二人の百姓が、落葉を掃集めてそれを燃してお酒を焼めてゐました。

すると樹蔭から一人の男が、ひよろひよると千鳥足で出て来て、

「林間に……酒を焼めて……紅葉を焚く……」と大きな聲で詩吟を初めました。

二人はまた、其所でお酒を飲んで踊つたり跳ねたりしてゐると、山の下の方から、大勢の百姓達が、

酒樽を擔いで、

佐保姫の、錦の衣縫ふ

秋は来ぬ、秋は来ぬ……

と歌ひながら上つて来ました。

但馬の守は右衛門は大變歌が上手でしたから、舞臺の真中で、

「鎌は越前、牛は但馬、鎌は何所で出来るやら……」と歌ひました。

それを聞いた越前の守は右衛門は、

「馬鹿！ 違つてるぢやないか。馬は越前、牛は但馬ツてんだよ。鎌は越前ツてのは間違ひだ。」と嘸

鳴りました。

「鎌は越前ツてんだい！」

「馬鹿言へ、馬は越前ツてんだい！」

但馬の守は越前の守は、自分が役者になつて、お芝居をしてゐるんだといふ事を忘れてしまつて、

本氣になつて喧嘩を初めました。そして二人は舞臺の上で本當の殿り合を初めましたので、山六爺さ

んは、大聲で、

「おいおい、今はお芝居の最中だよ。喧嘩をしておけません。」と言ひましたので、但馬の守も越前

の守も、やつと氣付いて、はははと笑ひました。

大勢は聲を揃へて、また、「佐保姫の、錦の衣縫ふ……」といふ歌を歌ひ初めました。そして踊つて踊

り狂ふて、みんなへとへとに疲れてしまひました。

みんなが踊り疲れて寝て居る所へ、又た美しい女神が現はれて、

「困つた百姓達だ、よろしい、今に眼を覺してあげよう。」と仰しやつて、高い山の頂に上つて行かれま

した。そして其所へ一人の風の神をお招きになりますと、雲の上から大きな縞ら顔の風の神が袋を背負つて下りて来ました。女神は少し腹の立つたやうなお聲で、

「風の神、百姓達はあんなに、お酒に酔つぱらツて寝てゐます。早くあの百姓達の眼の覚めるやうに、冷たい風を吹かして下さい。」と申しました。

「畏りましてございます。」と云つた風の神は、袋の口を少し開けて、山の下の方へ風を吹かせました。すると俄に山中の樹の葉は、ざアざアと動き出しました。紅い楓の葉は、はらはらと散り初めました。

冷い風が吹いて来たので、百姓達は眼を覺まして見ると、綺麗な紅葉がちらちらはらはら散つてゐますので、

「綺麗だ、本當に綺麗だ。」

「ねえ、佐保姫様が錦を織るやうだ。」

「こんな綺麗なものぞ、斯うして寝て居るのは氣が利かねえ、お酒でも飲まうや。」

「さうだ、賛成賛成。」

百姓達はまた酒を飲んで歌つたり踊つたりし初めました。

それを御覽になつた女神は、きりりと肩根を逆立てなすツて、

「何といふ馬鹿な人間だらう！ 風の神、うんと冷い風を出しておやり。」と申しました。

「畏りました！」と云つて、風の神は袋の底の方に入れてあつた、うんと冷い風を出して、ひゅーッ！と、それを吹せましたので、見る見るやうに山の木の葉は、はらはらと散り出しました。

はらはらと飛び散つてしまひました。

「あ、冷たい冷たい、早く内へ歸らう。」

百姓達は大周章に周章で、山を下の方へ駆け下りました。

舞臺には一人も人が居なくなりました。遠くの方から、面白い曲のマーチが聞えて、小さい人達が

百人も二百人も、白い帽子を被つて、白い着物を着て、手に小さい鈴を持つて、それをちりりん、ちりりんと呼びながら、

冬、冬、冬の國はどこぢや？

雪、雪、雪の子は此所ぢや！

と歌ひながら、面白く踊りました。そして第三幕は閉ぢました。

第四の幕が開きました。野も山も見渡す限りの銀世界で、大勢の百姓はみんな寒さに慄へながら、

小屋の中で蒼ざめた顔をして頼りに相談をしてゐました。

「もう食物が、ちツとも無い。我々はみんな此の雪の中で飢えて死んでしまはねばならない。」

「死ぬ前に、せめてお湯の一杯でも飲んでみたいものだ……」

「海も川もみんな水の山になつてしまつて、何所へ行つたツて、水一滴もありません。」

「それに地上といふ地上は、みんな雪に埋れてしまつて、何所へ行つても薪一本見付ける事は出来な

い。」

「ではやむを得ない！ 最後の思出に、此の小屋に火を付けて、一焼り温まつて死なうぢやないか。」

「だつて、家に火を付けようにも、マッチ一本ありやしない。」

「では我々は、もう此のまま此所で凍えて死んでしまふより外に途がないのでせうか。」

斯う言つてみんな、ほろほろと涙を溢しながら泣いてゐる所へ、女神が現はれました。

百姓達は吃驚して手を合せて女神を拜みました。女神は右の手に持つてゐた小さい金の杖で、御自分の顔の前に大きな輪を畫きました。すると不思議にも女神の身體中から、燦爛とした御光が照り輝いたので、大勢の百姓達はそれを見た時、俄に元氣が出て、

「神様、私共は今まで、花見だとか紅葉狩だとか言つて、お酒を飲んで歌つたり踊つたりばかりして遊びました。暑いと云つては懶け、冷たいと云つては怒りました。しかし、もうこれからは一所懸命に働きますから、どうぞ私達をお助け下さいまし。」と一人の百姓が、みんなに代つてお願ひ致しました。

女神は黙つてお點頭になりました。そして其の美しい、燦爛とした御姿が消えてしまつたと思ふと、急に東の方から、暖い太陽が出て、今まで雪に埋れて居た山から、青い木の葉が見えるやうになりました。

廻り舞臺がぐるりと廻ると、一面に緑の野でした。大勢の百姓達が鍬を肩げて立つて居ました。

「さア、今年は、しツかり働かう。春は花を眺めながら働かう。夏は涼みながら働かう。秋は紅葉を賞めながら働かう。冬は雪を見ながら働かう。」と一人の爺さんが言ひました。

「しかし、御五は、今も米一粒も無いので、働かうと言つたので、食糧が無くては、どうする事も出来ません。」と一人の婆アさんが申しました。

一同は折角働かうと決心したのでしたが、婆も米も一粒も無いと聞いてがツかりしてしまいました。その時、何所かで、「ドーン！」といふ大きな響がしました。

「今のは何の音でせう？」と若い娘が言ひました。

「あれは、隣り村の山六學校の鐘でせう。」と若い男が言ひました。

「さうさう、隣村の山六爺さんの所では、チーンチーンの鐘が鳴つて眼が覚めて、ガーンガーンの鐘まで働いて、ガーンガーンからドーンドーンの鐘まで一所懸命に、天の事、地の事、人の事を勉強するんだといふ事だ。それからドーンドーンからチャーンチャーンの鐘まで一所懸命に遊ぶんださうな。能く働いて能く勉強して、能く遊んで能く寝るので、近頃では食べても食べても食べ切れな程、お米やお婆が澤山あるさうです。」と一人の爺さんが申しました。

「では、其の山六爺さんの所へ、お米を借りに行きませうか。」と小さい子供が申しました。

「さうしよう、それはいい所へ気がついたもんだ。」と云つてみんなが、山六爺さんの村の方へ出かけようとする所へ、向ふの方から大勢の人が、ぞろぞろとやつて来るので、みんなは吃驚してそれを見てもまずと、眞先に來たのは、山六爺さんと婆アさんとしてした。

大勢の若者は、各々三斗宛お米の入つた袋を肩げて、後へついて來ました。

「あなた方の村には、もうお米がちツとも無いといふ事を聞きましたので、私共はお米を八十石と、お婆を五十石と持つて參りました。どうぞお食下さいませ。」

本誌顧問

西川 勉氏
 中山 晋平氏
 野口 雨情氏
 山村 暮鳥氏
 藤森 秀夫氏
 西條 八十氏
 北原 白秋氏
 三木 露風氏
 弘田 龍太郎氏
 本居 長世氏
 (イロハ順)

大きい宇宙をつくつた造物主が、私どもに童謡を興へてくれたことを非常に感謝してをります。私どもは今年日本童謡會と云ふ真摯に純童謡を研究し、併せてその普及を計る會を作り「とんぼ」と云ふ月刊雑誌を發行しました。私どもは先驅者の指導と皆さまの熱心な研究をおほいでその成果をあげようと思ひます。

童謡研究

月刊雑誌

とんぼ

定価 一月三十五銭
 會員誌代割引
 其他種々の特典と便宜あり

創作童謡、童謡に関する論文、感想及び自由詩を募集します
 會員規定は返信料を添へ編輯所宛に御申込次第送附致します

日本童謡會とんぼ社

發行所 東京市四谷區舟町三番地
 編輯部 振替口座東京四四一五〇

六月號要目

表紙	初山 滋
曲譜	本居 長世
童謡	三木 露風
	西條 八十
	山村 暮鳥
	藤森 秀夫
	中條 辰夫
	初山 滋
	藤森 秀夫
	西川 勉
	加田 愛咲
研究	社員會員童謡、自由詩、批評、てまらうた。其他記事
	満載、菊版總六號

山六爺さんが斯う言つたので、昔者はみんな米袋裏袋を舞臺の上へ山のやうに積みました。村の百姓達はみんな草の上に乗つて、山六爺さんにお禮を申してゐる所て第四幕は終りました。お芝居が終つた時、千六百人の役者はみんな、「面白かつた、面白かつた」と云つて、自分達のした芝居を賞める爲に手をたたきました。

(つゞく)



第九回 兒童博覽會

大正八年十月十五日
大正十年六月六日
大正十年七月一日發行(每月一回一日發行)

東京 キンノツノ社 發行

七月一日より
八月九日まで

開會時間は
午前八時より
午後五時まで



東京 三越呉服店

に於て